



江戸名所圖會

二

沖
二
三
廿
三

ル 4
5105
2





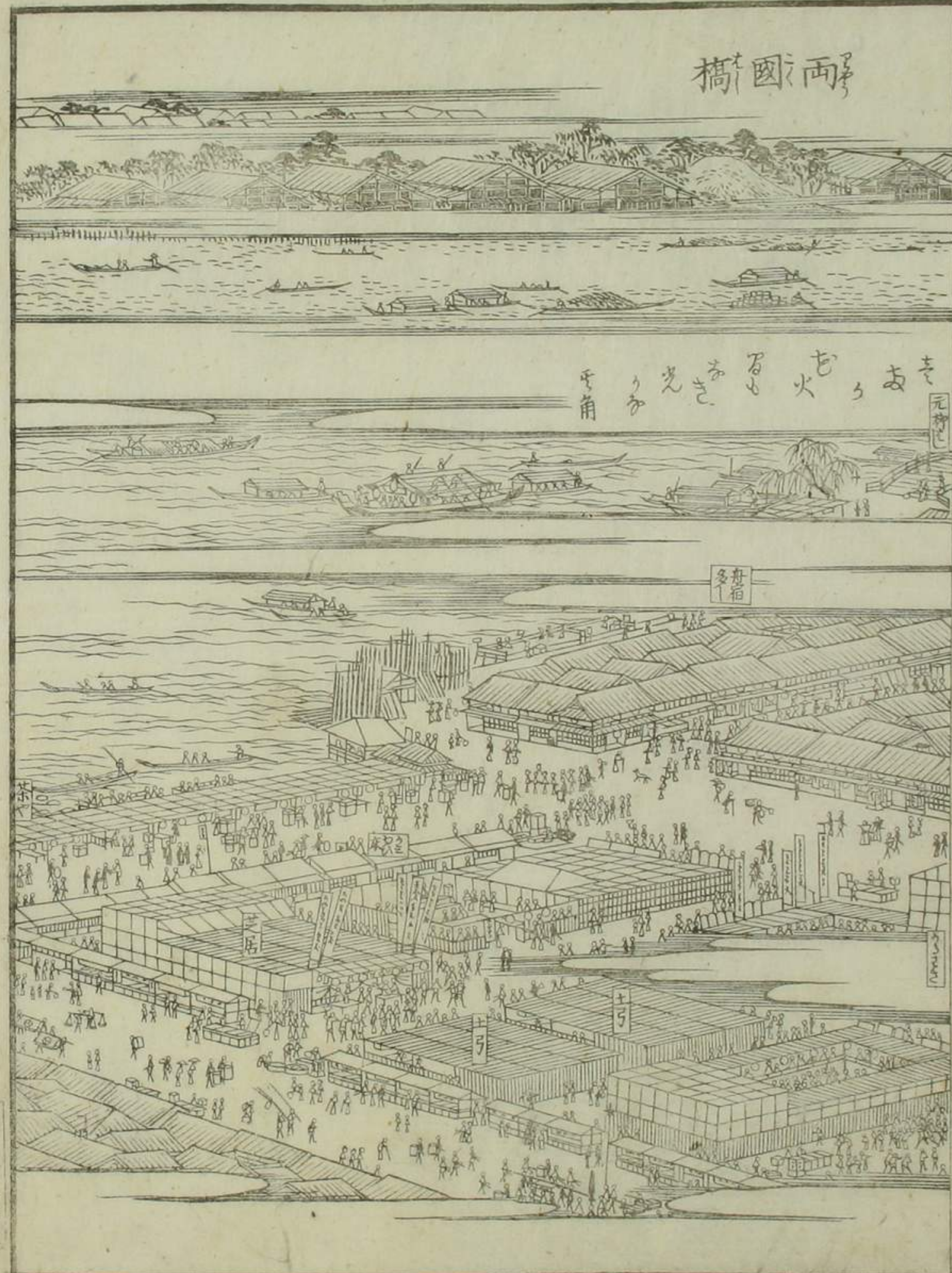
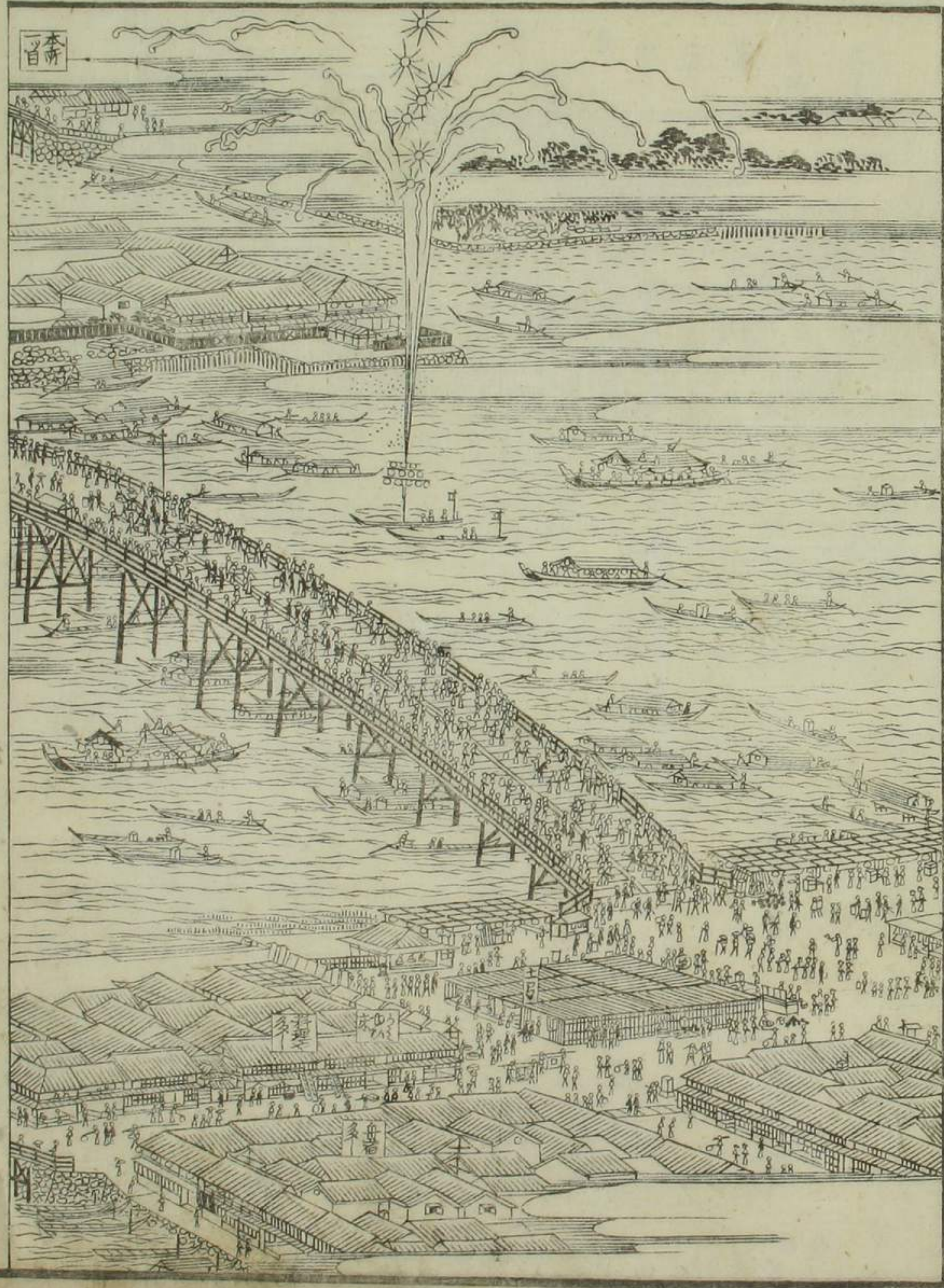
連ね燈の光ハ玲瓏と〜流小映中樓船扁舟所せ〜
一時水面を覆ひかへてあ〜陸地は異なり〜
耳小満々響〜実小大江戸の盛更なり

此人救給ふは〜
子人々多を標榜也〜
この〜
芭蕉

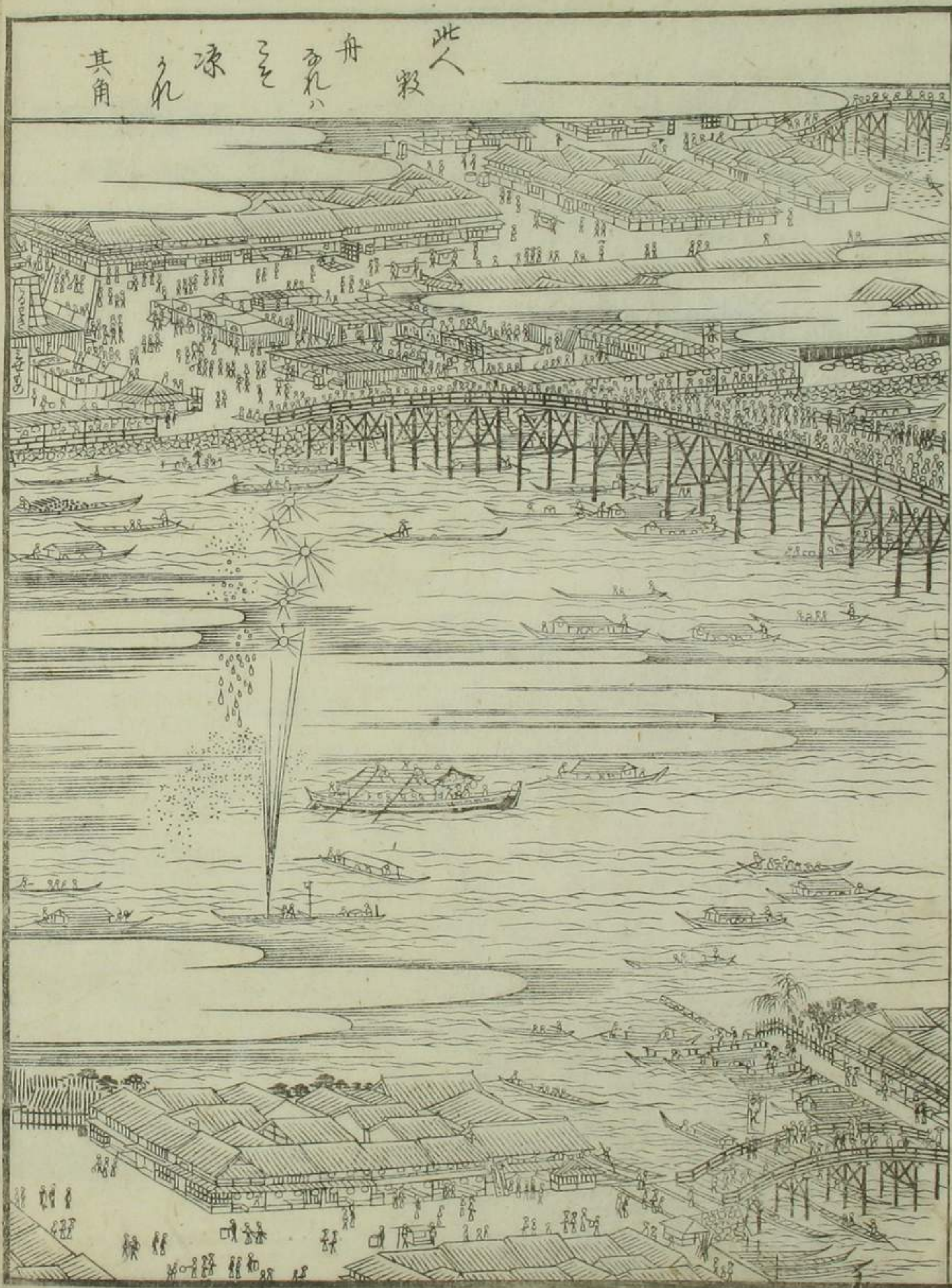
清水如水宅地 横山町は住〜
歌よ名あり 常酒〜
法師採各在奇は名あり〜
如水一時大和國法隆寺は蔵〜
見〜
其巧尤絶妙なり依て〜
押へられ〜

清水如水宅地 横山町は住〜
歌よ名あり 常酒〜
法師採各在奇は名あり〜
如水一時大和國法隆寺は蔵〜
見〜
其巧尤絶妙なり依て〜
押へられ〜

昭和41年12月20日
原安三郎 贈



此人 舟 氷 其角



より東は菜研堀と云ふあり其辺知人の許は行き樓上より
遠近を見やり

又ある時漢父の辞の意をいふ
又ある時漢父の辞の意をいふ

享保十三年戊申正月三日朝起

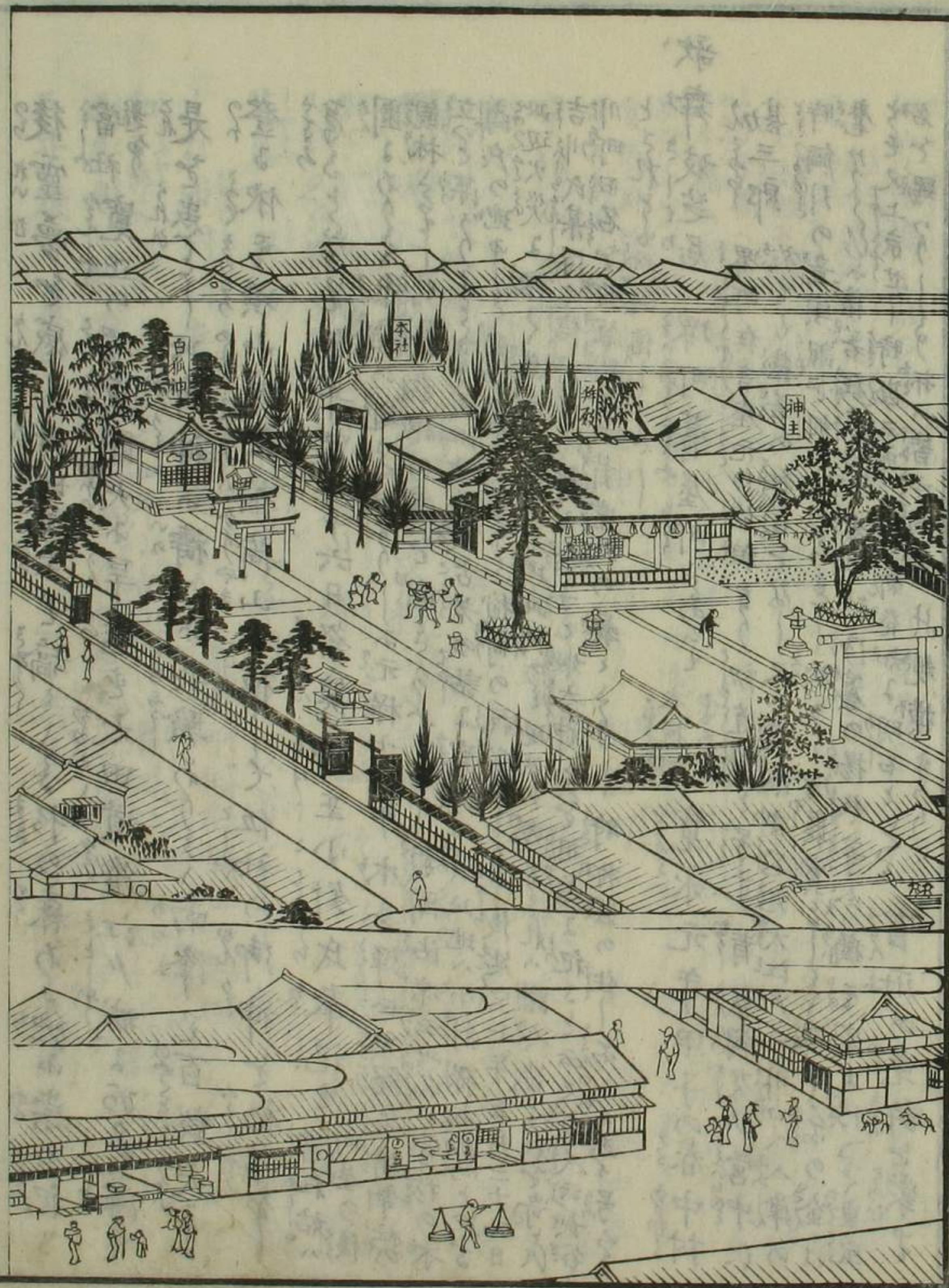
かゝるく同く五日の暮方利頭湯あり太神宮を拜し

しるす終るとし

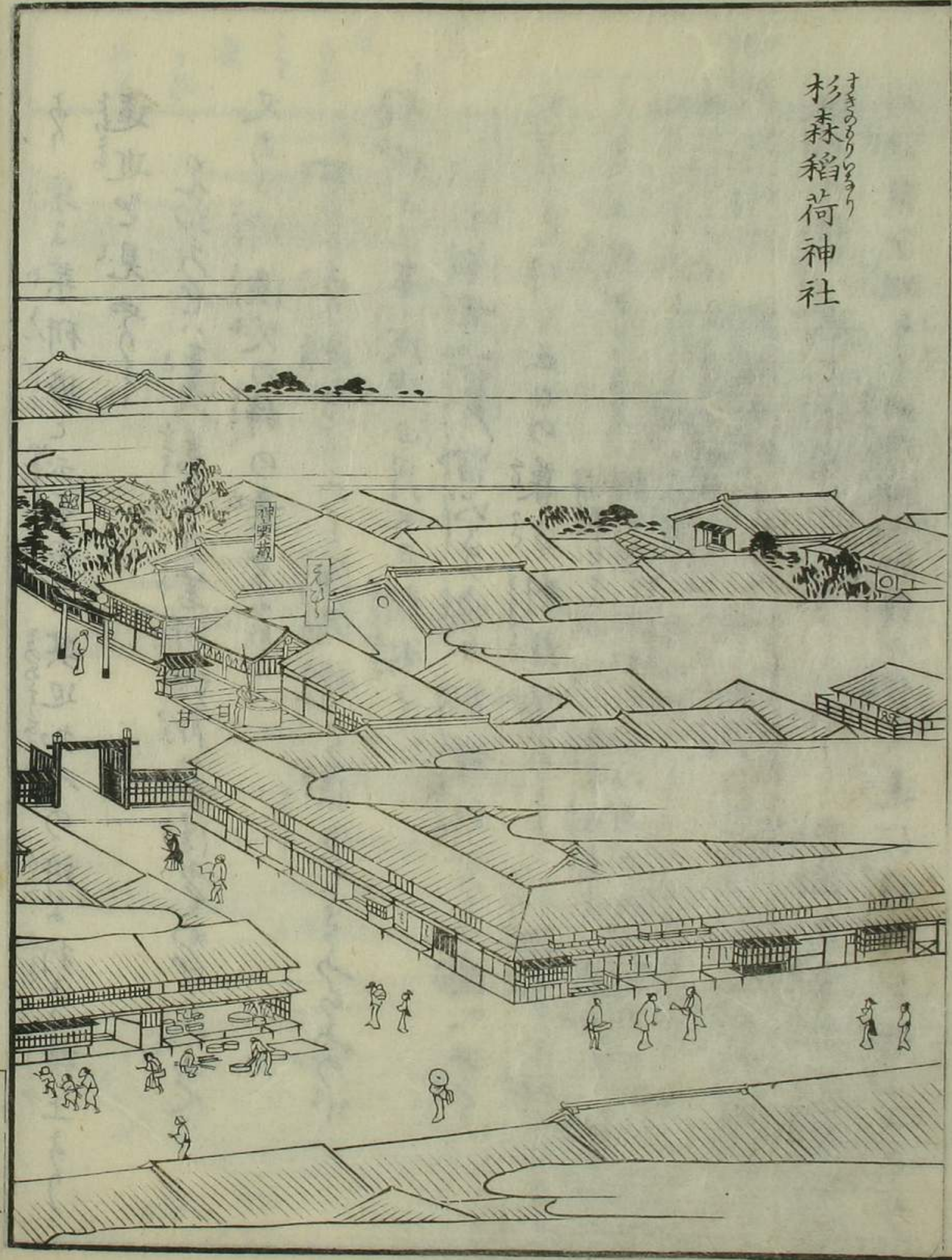
相馬の将門威を東國へ逞し

の計策を廻ら此河神の加護依り遂に将門を七

杉森稲荷社 新林木町あり

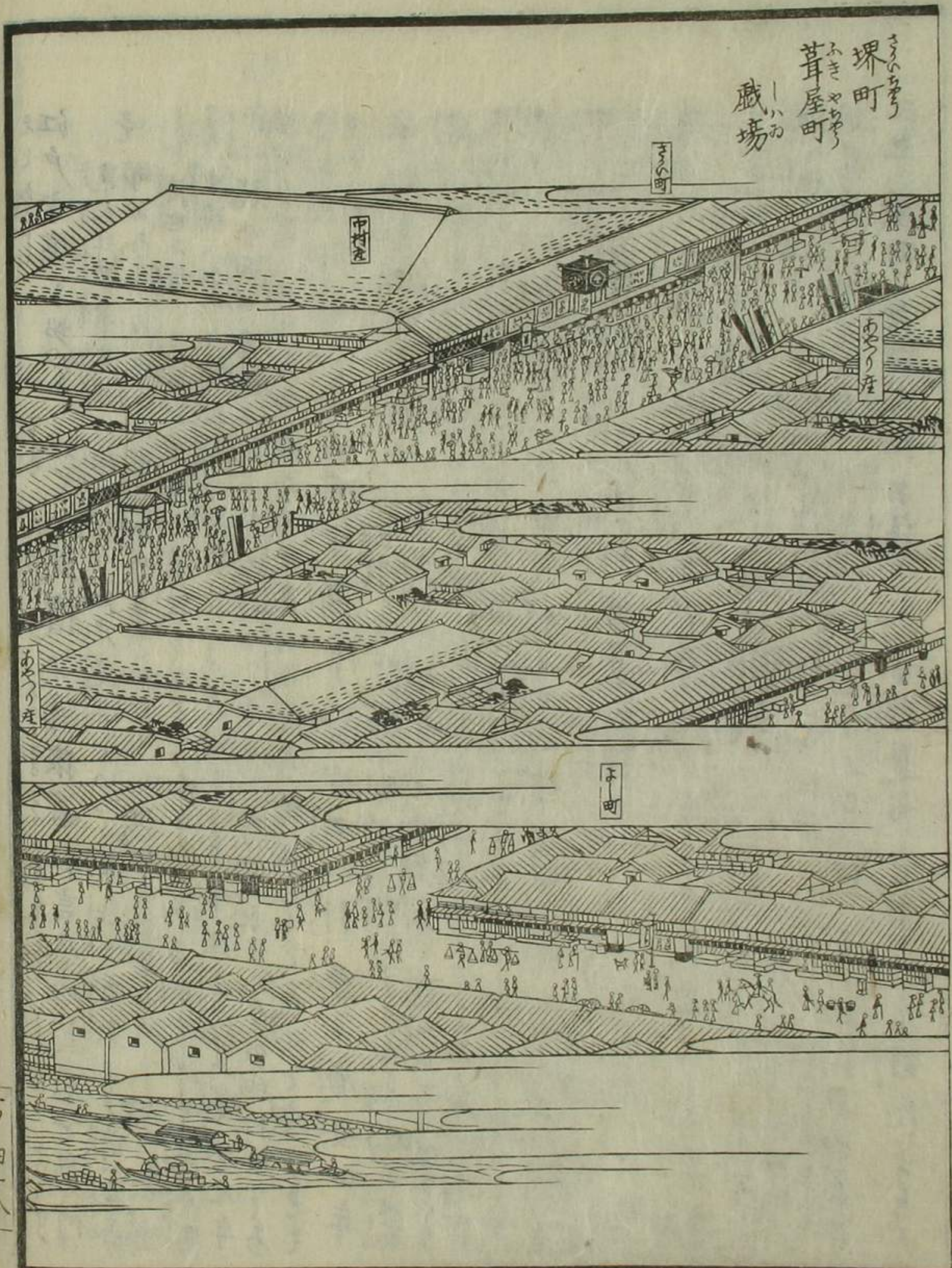
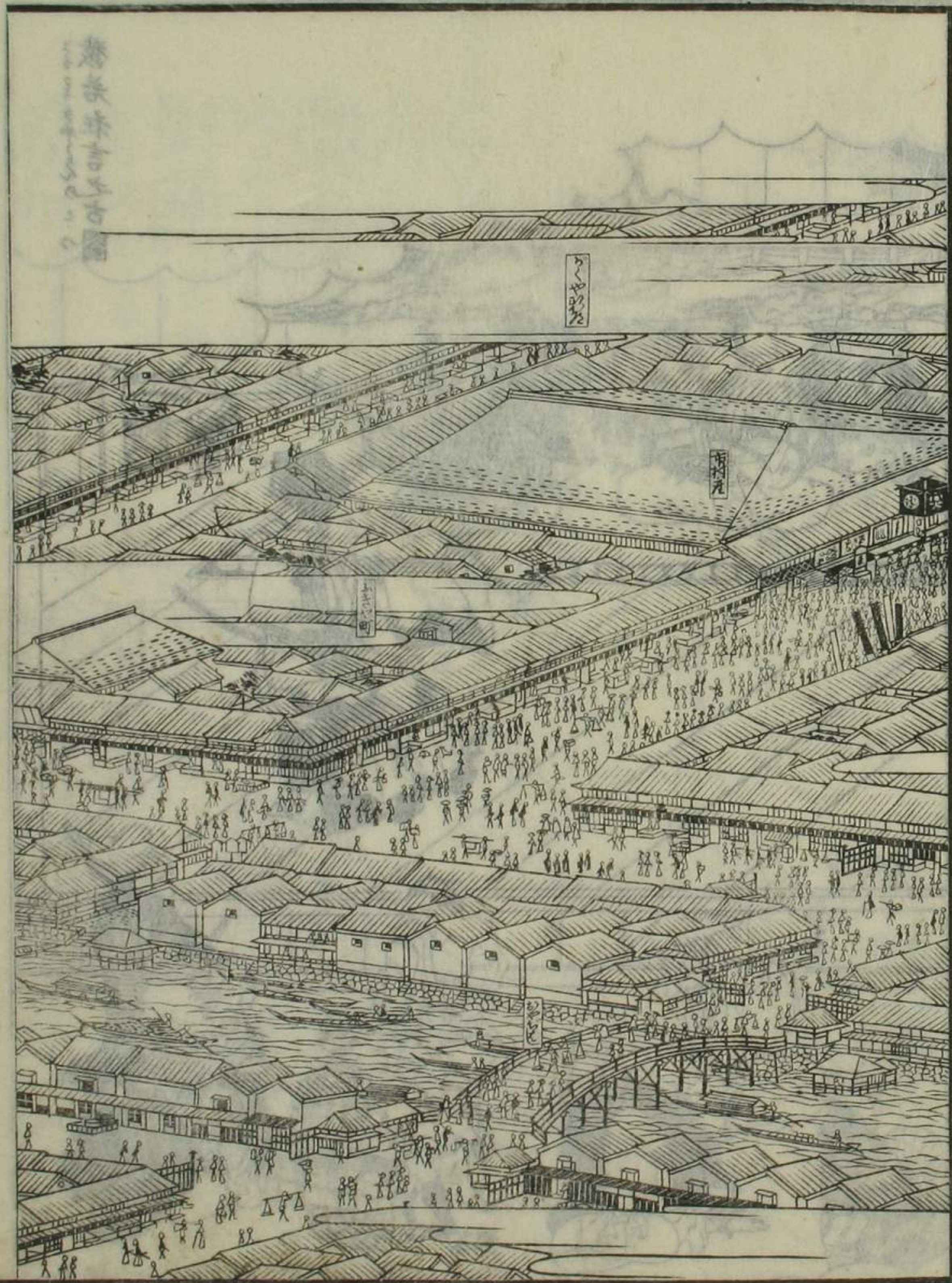


杉森稻荷神社



後靈夢を感し此地に至る橋くさる杉の森あり地小崇め祀る
當社寛正の頃東國大早魁を太田道灌江戸城より深く
是を患とす此御神を禱す不其驗あり雨降る百穀大り
登る依り頃山城國稻荷山を摸して伍社の御神を勧請か
毎年四月十六日祭奠神主小針氏奉祀也
園より参詣の道なり元禄十六年本多弾正少弼晴寺社の
観林より時社参詣の道を開き
高戸の地中より被宅地あり
此火災は依り焦土となり
吉川氏某深く信仰し新に蛭子と姫大神とを相殿に祀ると云又或人云長谷
川町旧名を神宜町と云昔當社の龜より時神宜の住し
とされし此説信
歌
舞妓芝居 堺町菅屋町あり
寛永元年甲子の春中村
甚三郎 堺町在言座元の始祖なり初道順と号す昔禁闕及ひ宮中に
時綱列の音頭を祖とす又官船安宅丸大江戸の川口へ入津の
塵を又上京せし時勸三郎の作報を以て揚興等今猶そ家へ傳へる重宝
名を賜りし時勸三郎の作報を以て揚興等今猶そ家へ傳へる重宝

江戸中橋の始り太鼓櫓を揚振若狂言尽の芝居を興行
是大江戸常芝居の始元なり江戸鹿子とて草紙に寛永より前芝居
町ありと記せし柴井町の書を改め云なるん次按芝居あり一
し後世不至芝居を柴井の書改め云なるん次按芝居あり一
日本橋の西河岸町小芝居を興行し可考寛永十八年の印行の
物賤群集 冊子中橋より米島丹後守奇舞妓ありと高札を建
貴賤群集 同九年壬申中橋より神宜町へ引遂は慶安四年
辛卯今の地に移る 神宜町とて今長谷川町の
寛永二十年印本吾帯りりし神宜町は左近とて奇舞妓芝居
又角力外薩摩大夫虎屋操土佐の能なりとて奇舞妓芝居
趣を奉 又寛永十一年甲戌村山又三郎といふ者 名獲屋山三郎の
弟子村山又左衛門の子村山 泉州堺より此地を下り公許を得る常
又八とて若の次男ありとて 役者をまへ舞子六人小勤
芝居を興行し能の狂言を興行し 役者をまへ舞子六人小勤
む市村羽左衛門座是なり 菅屋町在言座元の興起なり二代目を
勘三郎の弟より寛文四年より始り菅屋町在言座元二代目明石
道具建を製物に成ふ其頃市村座と大芝居と稱し引幕 其後萬治
三年庚子森田太郎若清といふ者是れ官府の免許により



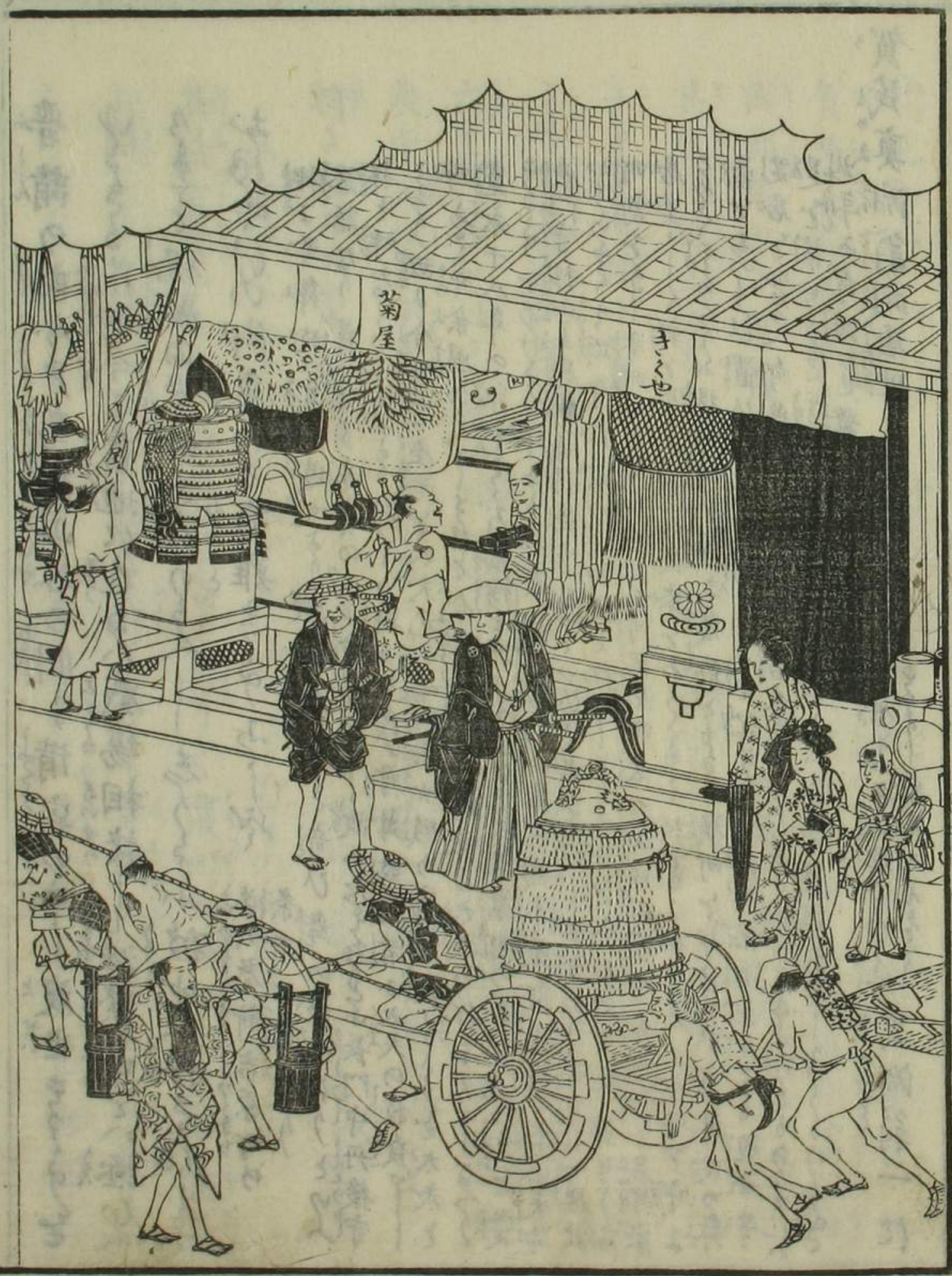


若狂言の古圖
若狂言の古圖

木挽町五丁目汐入の地へ芝居を取建坂東又九郎といふ者の
二男又七といふを養子といふ名を森田勘弥と改む
同卷木挽町 其餘塚町菅屋町の間ニ操座木偶芝居ありて四時よ
の下の講 元禄開校の江戸鹿子ノ塚町菅屋町の二丁ハ古ヘより操見せ物又ハ在
賑ツヘリ 言及ありハ放下の品玉襷切の曲を業とせし者とも寄あつたり終日
観承をある地あり又江戸名所と稱す江戶大薩摩土佐の大夫和泉美
浄瑠璃天満ハ大夫江戸孫四郎 江戸半太夫 説経鶴屋源太郎 南京あゆりあり
いふことをあせり

吉原町舊地 和泉町高砂町住吉町難波町等其舊地なり
俗稱なり此の溝ハ則昔の曲輪の外堀ありと云 慶長十七年庄司甚右衛門
とつて者街を一所ニ定めり度旨 官府ニ訴へたり一初
初て此地を賜り花街とす往時慶長の頃迄ハ江戸ニ定ま
たる傾城町もあく二軒三軒つゝかゝる散在せし之中軒を
並へりハ麴町八丁目あり十四五軒あり何れも京六条より
迂る又鎌倉河岸あり十四五軒大橋柳町あり廿軒あり一と云

此大橋と云ハ冷のときかきこ 此柳町ハ駿府弥勒町より移り至外伏
柳町と云ハ道三河岸の辺と云 見夷町奈良本辻等あり追々大江戸に移り慶長十一年の頃
柳町の地ハ召上り元誓願寺前へ引移り傾城屋とも打寄
相談の上場所取立度由願りれと御免なす庄司甚右衛門
初て同十七年の頃願ひ元和三年の頃御付付元和三年霜月地
形普請出来て高賣せり江戸町一丁目ハ一統の後初て開基せし
ゆゑか号け同二丁目ハ鎌倉河岸あり引京町一丁目ハ麴町より
引同二丁目ハ追々来り上方の傾城屋を置し一兩年やて
普請悉く成就せしハ新町と名付り角町ハ京橋角町より
うの寛永三年に至り五町全く家居落成し此地に移る
然も明暦二年浅草の淺今の地へ迂るんをヤリて
つとも明年引移り度由の所翌年五月十八日の大火ニ焼亡す
依て同年六月悉く元吉原の地を引拂同年八月今の地へ移る



大門通
 昔此地は吉原町
 あり一頃の大
 門の通りあり
 今よりかく
 名づく今銅
 物屋馬具所
 多く住り

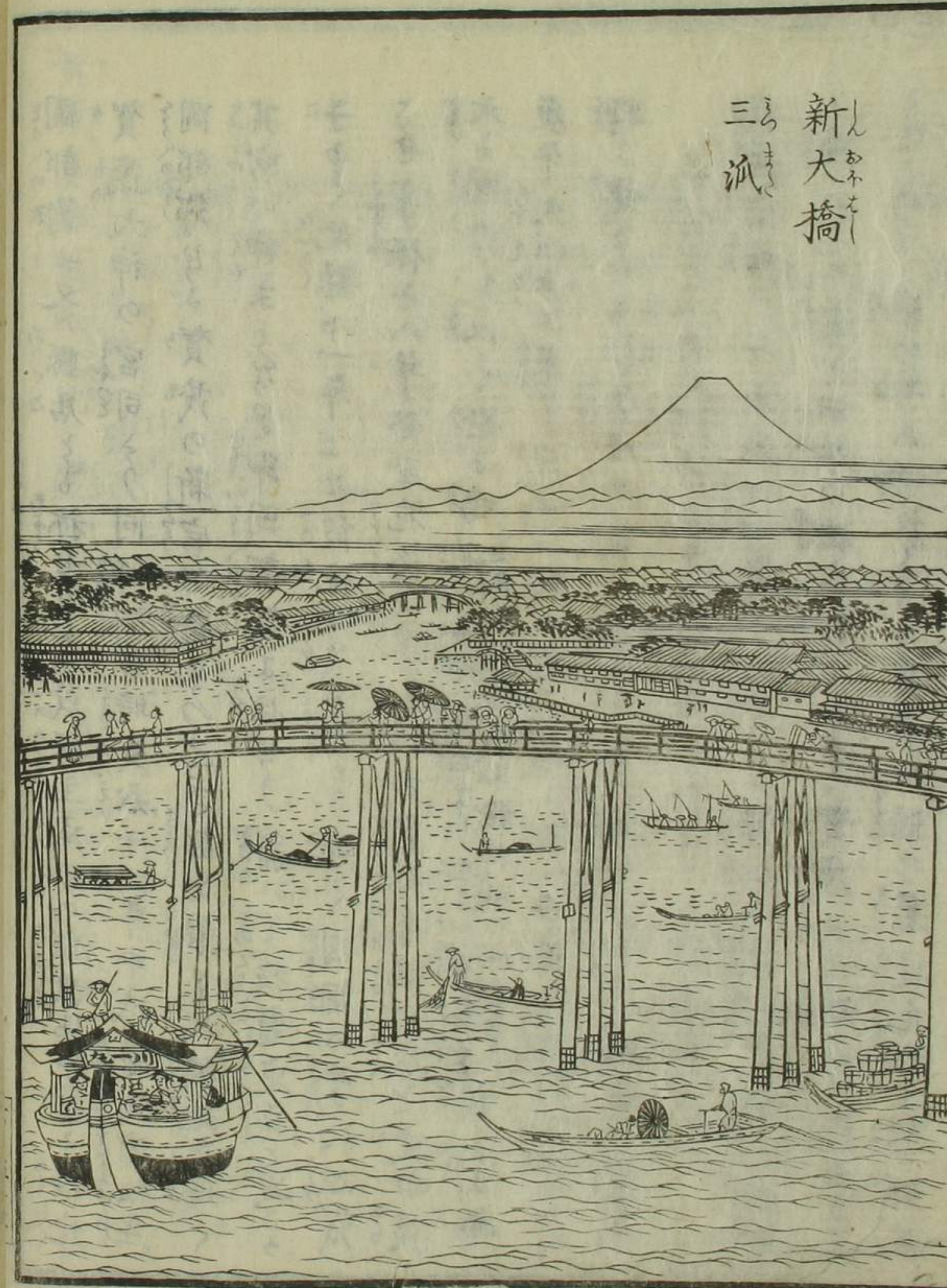
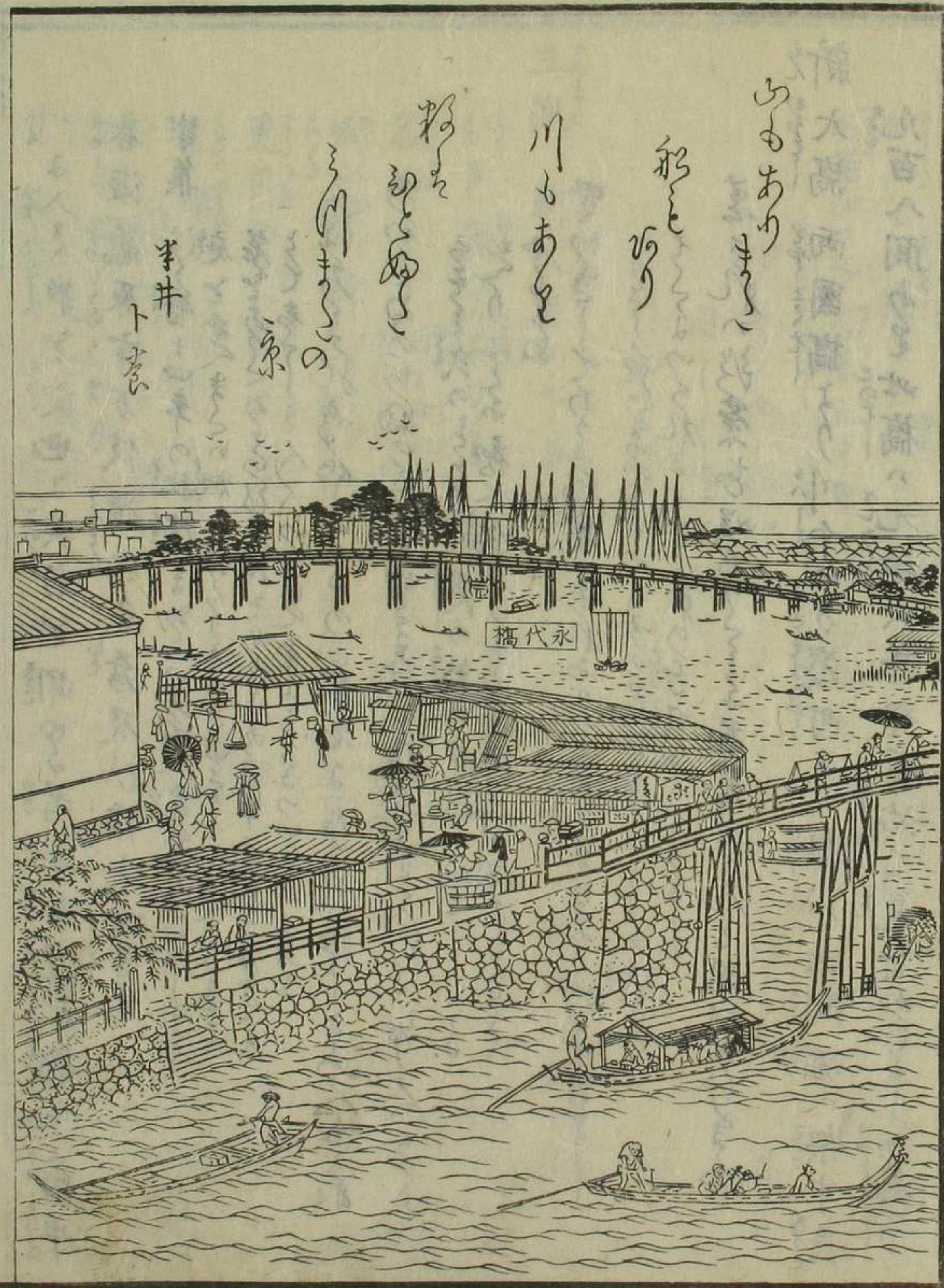
清
 ひさ
 うれぬ
 月
 市
 の
 妻
 手角

普請の間今戸鳥越山谷の間は借宅として渡世をうけ
ゆきたる花街今は舊地に在るに戲場相接し滋繁昌と極り
る事と祝融の祟弥々たるをへし志らるる小彼地へ移されり
おほやけの御恵つと有難き事なり

概は奇舞妓の始祖遊女ありはるる名小奇ひ舞の妓女なりといふ
畧語なり昔は高貴の人を愛せしむる故小長門守丹後守
採と呼ぶなり今在言座元と大夫と唱へる奇舞妓は長門守大夫の稱
あり故は今在言座元と大夫と唱へる奇舞妓は長門守大夫の稱
寛永十八年の印本とて中も佐渡島吉村山左近國本織部北野大夫出島
長門守杉山主殿島丹後守と稱せしむるを又日を重ね此町繁昌と
町割とて本町とて京町江戸町伏見町堺町大坂町墨田町新町と名付家
居美しく軒を高く軒の板家をあはせり板常は作らるる又板町を中
臺をあはせり置ひしとて與に記せり又江戸名所記等にも遊女等
是を禁せり奇舞妓とて記せり奇舞妓と云ふを與に記せり
賀茂真淵翁兩居地 濱町は
寶曆十四年此地へり街 真淵翁一に

岡部衛士又ハ縣居とも稱せり賀茂縣主成助の末葉はして世々洛北
賀茂大神の宮司より同師朝の時文永十一年甲戌遠州濱松庄
岡部郷なる賀茂の新宮を齋まつとて詔を蒙り又彼地を賜く
其宮の神主となり即岡部郷に住せり翁ハその後裔定臣といふ
子ゆく元祿十一年丁丑彼地は生る壯より深く國朝の學に心成
よせ享保十八年癸丑花洛小至り荷田宿禰春滿の教を受け後
大ニ國學を以て世々鳴 荷田宿禰ハ本姓なり世々羽倉齋宮 寛延三年
庚午大江戸ふ来り田安の殿の召ふ應へ古への書の道の博士とて
特よ愛させあひて項沔衣を賜りりハ其かこまりふ和奇をせらる

あひてあひて此衣を氏人のかつむものと辨ありとん
其後宝曆十年庚辰仕をわへり濱町小隱拙を翁を縣居
と唱へる庭を田居の橋よ作らるる賀茂氏の姓も縁ありと
とてろろ家の号ふ呼れり生涯の著述凡六十餘部其



門子入る教を受世は其名を聞ゆる者本居宣長橋千蔭平
春海藤原宇万伎揖取魚彦及び倭文女等之
家集はる橋十四年の秋瀨まこといふ所へ遊をうけし
庭と申すは八幡ははるりてあつてさうかへんがもて
名をあらわぬひてはるめたる九月十三日お月あそん
とてあつてさうかへんがもてさうかへんがもて

あかこぬのちぬの流系かまはけり月あそんがりる都人うも
こほろりしれゆやあつてこの名をよめけはるりてさうかへんがもて

聖ひきりてあつてはるあれあつて月あそんがもてさうかへんがもて
さうかへんがもてさうかへんがもてさうかへんがもて

まされハ流系もあつてさうかへんがもてさうかへんがもて
さうかへんがもてさうかへんがもてさうかへんがもて

新大橋 兩國橋より川下の方濱町より深川六間堀へ架す長
凡百八間あり此橋ハ元祿六年癸酉始て是をわけあふ兩國橋の

旧名と大橋と云故に其名よよ川と新大橋と号らるなり
風羅袖日記 元祿五年申年の冬深川大橋

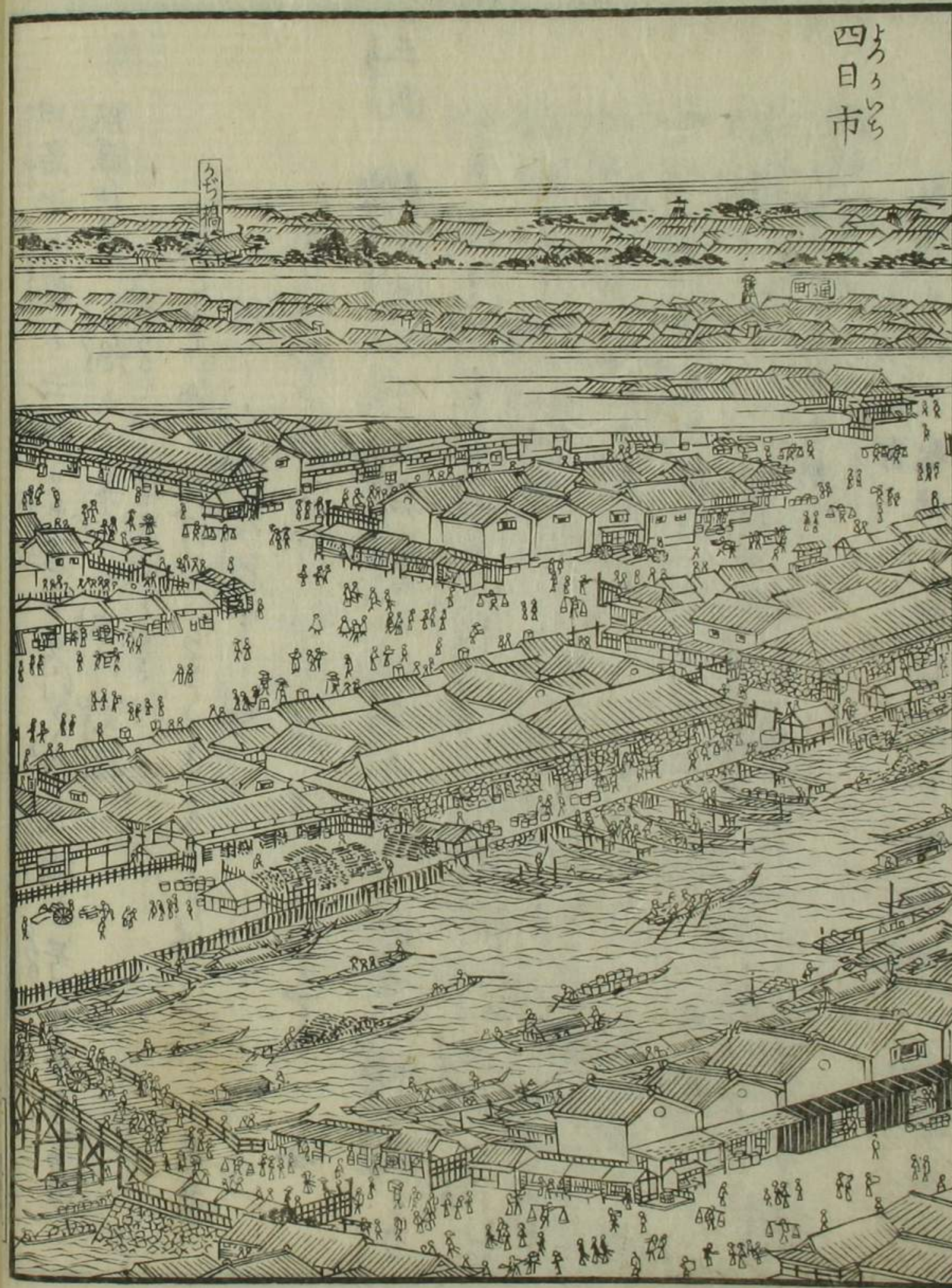
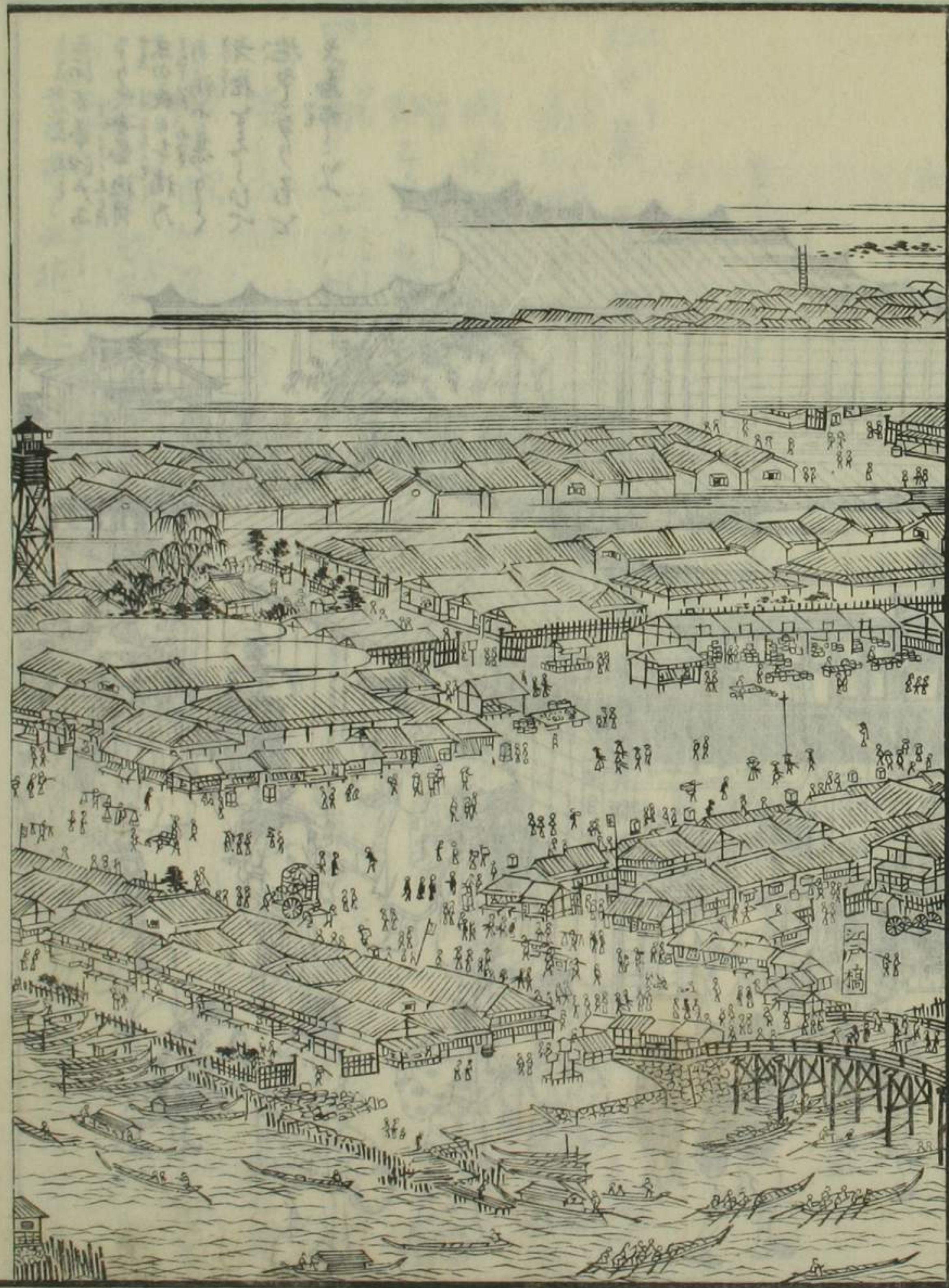
初めやわけりてさうかへんがもてさうかへんがもて
同く橋成せし時
ありかやわけりてさうかへんがもてさうかへんがもて 全

三派 新大橋の下分流の石を云浅草川と箱崎の間の流との

名所なり 因に云明和八年辛卯中流を埋りて人居とす中洲と稱せり
堀立昔ハ多く遊女奇舞妓の類ひこふ船をうけりて宴を催し殊
更月の夕ハ清光の隈なごを詠ひ酒は對して奇諷ひかんと
甚賑かりしとなり
江戸雀子諸國の大船珠は糖船此川よかふる
隅力と猶涼の地なれば船遊ひの船は波の

風静又江不起波 輕舟汎々醉中過 天遊只

三义江泛舟
風吹なりしと云く



三河万葉江六
 下りて毎朝極月
 末の夜日本橋乃
 前夜集りて
 戎籠とえしひて
 抱ゆるり是と
 戎籠市とよ



在人間外 長嘯高吟雜掉歌

人々よとよありしは八月の十六夜三浦ふぶき
 うららかに眠るまゝりしは九月の八日
 年十六なりといふこと

いもありあつてあつてあり川もわろ敷いひとゆゑの里に系 全 ト養

江戸橋 日本橋の東よりありて伊勢町より本材木町へ杉間架は

南の橋詰巽の角は船宿あり江戸の内諸方への船場あり又

同所西の方木更津河岸と字を房州木更津渡海往還の

船々小集りあふ名とす

四日市 江戸橋と日本橋の間川より南の方の大路を云昔ハ四日市

場とのひ一村ありてあつて今ハ繁華のめきなりなれハ萬の賈

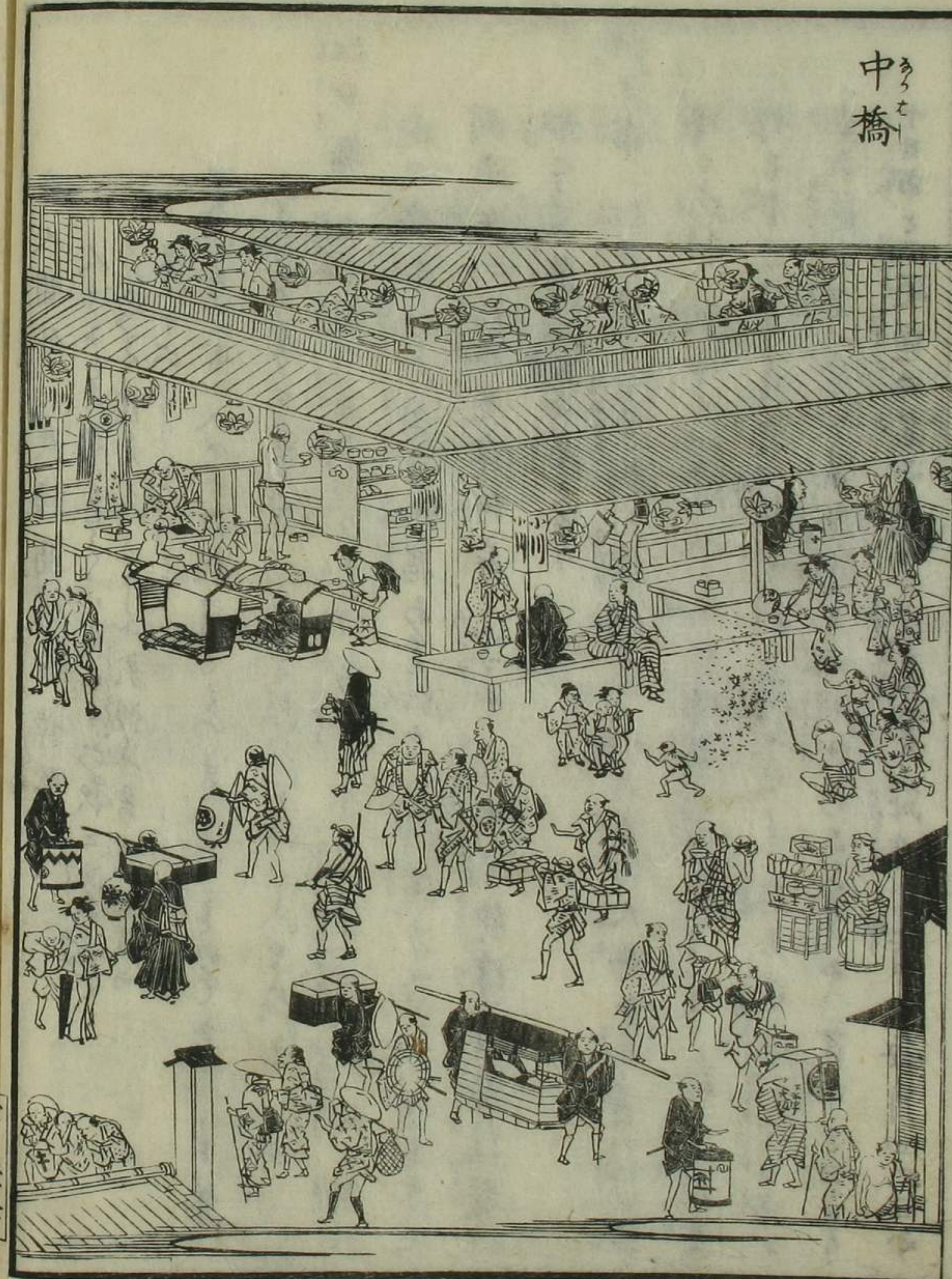
街も市をなすて交易せられハ得て一なるあつてにそ日市と

立る區を名つけし某日市と云羽州のあつてあつて二日市と云より

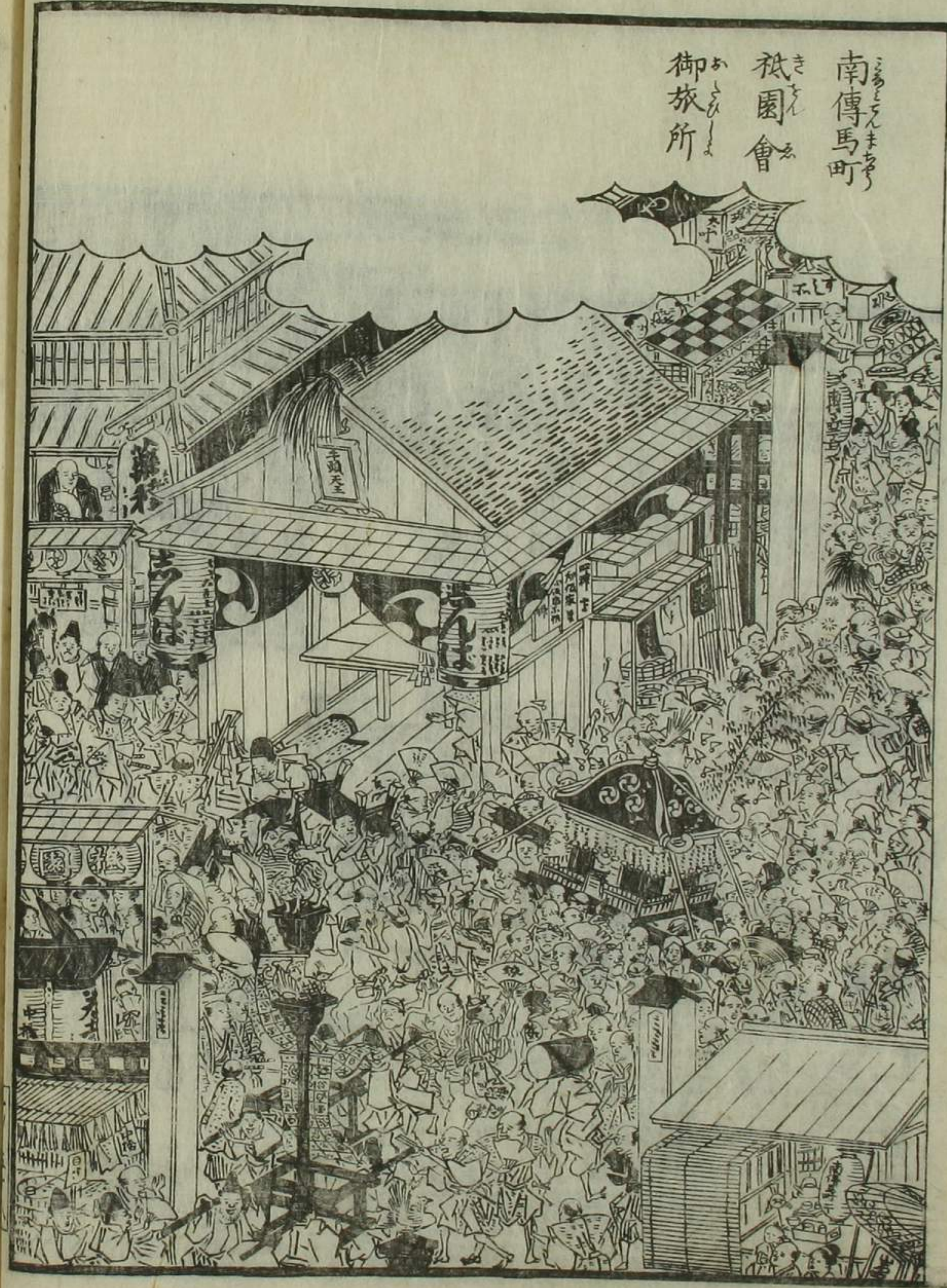
十日市と云迄區の名小はつき交易せり此地も昔ハ毎月四の日ハ



中橋

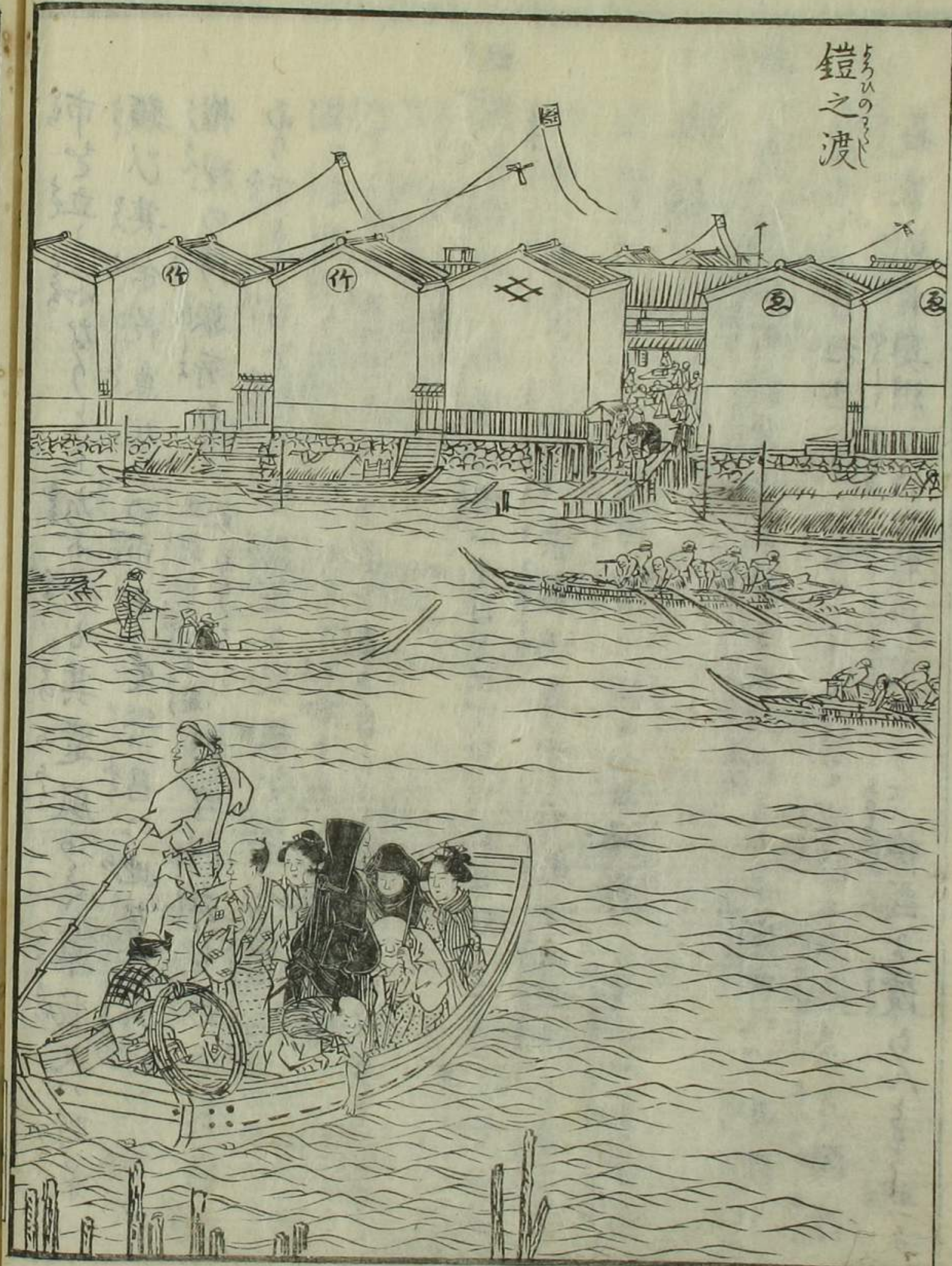
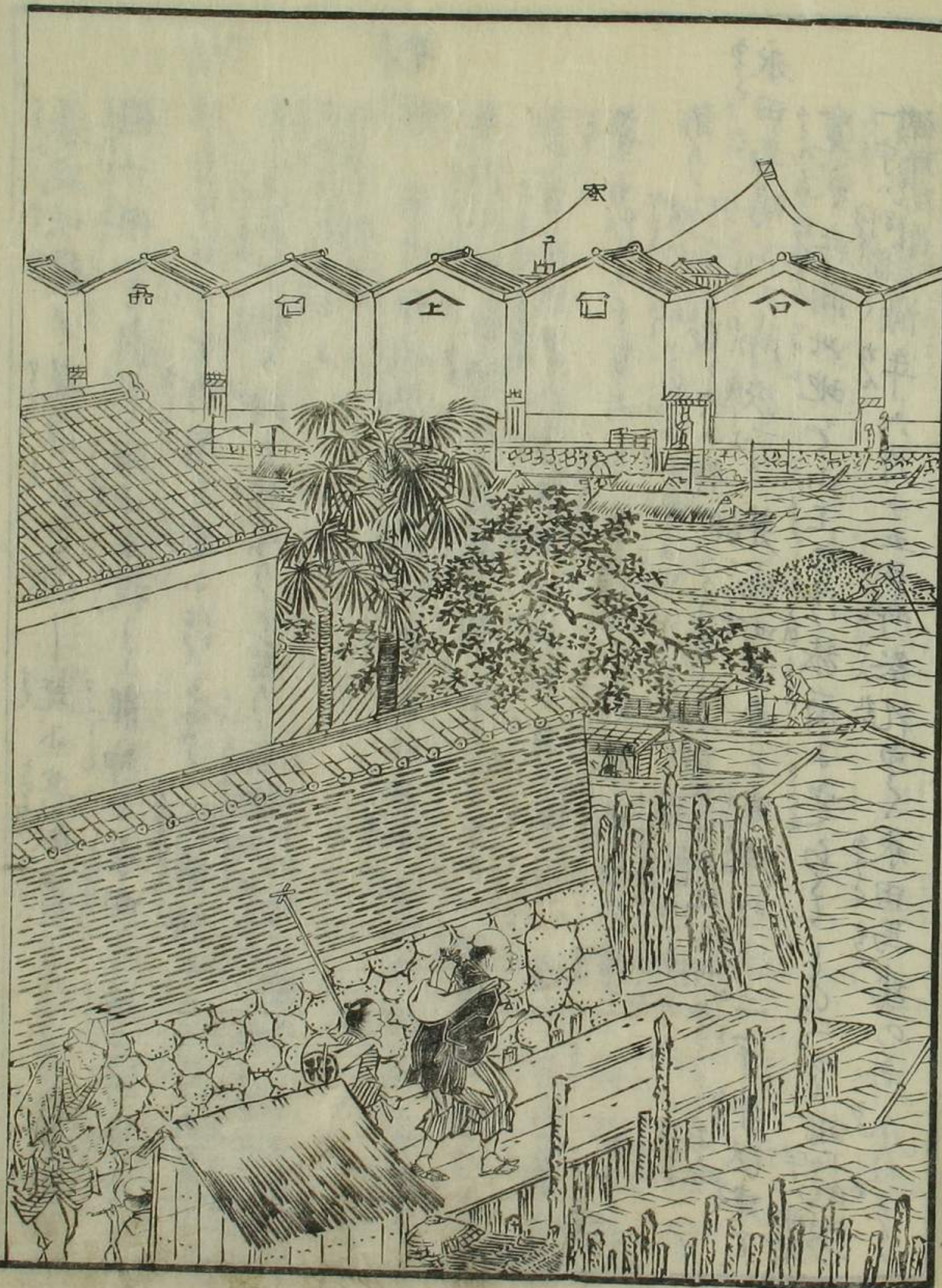


南傳馬町
祇園會
御旅所



市を立し不なりとそあふ今も其遺風ゆく草物又ハ野菜の類ひ其余乾魚などの市ありて繁昌の地なり此地に根津権現の涉旅所あり正徳年中造同所河岸は傍く封疆蔵あり下より石を以て畳揚上小家根を覆ふ明暦開校のむじあ橋の南萬町より四日市迄の町屋を取除け高き四間川端北より所家ありて此地よりより祇園會旅所 南傳馬町一丁目と二丁目の間の辻あり本社ハ神田明神の地あり祭所素盞鳴尊中て是を大政所と称せり毎年六月七日らよ神幸ありて同十四日帰奠なる其間赤詣多く甚あまひへり

鏡の渡 茅場町牧野家の後を云此所より小畑町への舟渡をある唱へたり 往古ハ大江なりしとかなるを里諺ハ云永業年間源義家朝臣奥州征伐の時此所より下徳國に渡らんとせ時



暴風吹發して逆浪天を浸し既小其船覆らんとも義家朝臣
鎧一領をとり海中に投し龍神より向く風波の難なる
らしむむを祈請を遂ふはくなく下徳國小着岸あり
あり此所を鎧淵と呼へりとなり
此所小兜鎧を置兜塚に築く
ありと記せり

兜塚 同所海賊橋の東詰牧野家の庭中あり源義家朝臣

奥州征伐凱陣の先報賽のつめ且東夷鎮護の爲と

し日本武尊の古き例に準ひ自の兜を一堆の塚に築き

箆をひりしなり今其傍に義家朝臣の靈を鎮侍小祠

あり紫の一本とて双糸甲山とあり藤原秀郷平将門を討

永田馬場山王御旅所茅場町あり遙拜の社二宇並ひ建

寛永年間此地を山王の御旅所と定りしとて一宇は神主
一宇は別當
觀理院持し

神輿三基此所は神幸あり假し神殿を儲け供御を献備し

別當は法樂を捧げ神主を奉幣の式を夕ひ夜入る歸輿

なり其行装神大幣菅蓋錦蓋雲の如く社司社僧ハ騎馬よ

跨り或ハ輿小乗し前後は扈從を諸侯よりハ神馬長柄鎗

等を出されし途中の供奉嚴重なり又氏子の町よりハ思ひ

練物ありハ花屋臺車樂等ハ錦爛純子杯のまん幕を打

て各々出立花やうハ羅綾の袂錦繡の商をひらき粧ひ

巍く堂くとて善美を尽せり此日官府の沙汰とて

神輿通行の沙道筋ハ横の小路とてハ矢来を結りて往

来を禁せり実ハ大江戸第一の大祀ゆり一時の壯觀なり

藥師堂 同く御旅所の地あり本堂藥師來ハ惠心僧都の

作なり山王権現の本地佛とてハ慈眼大師勸請あり

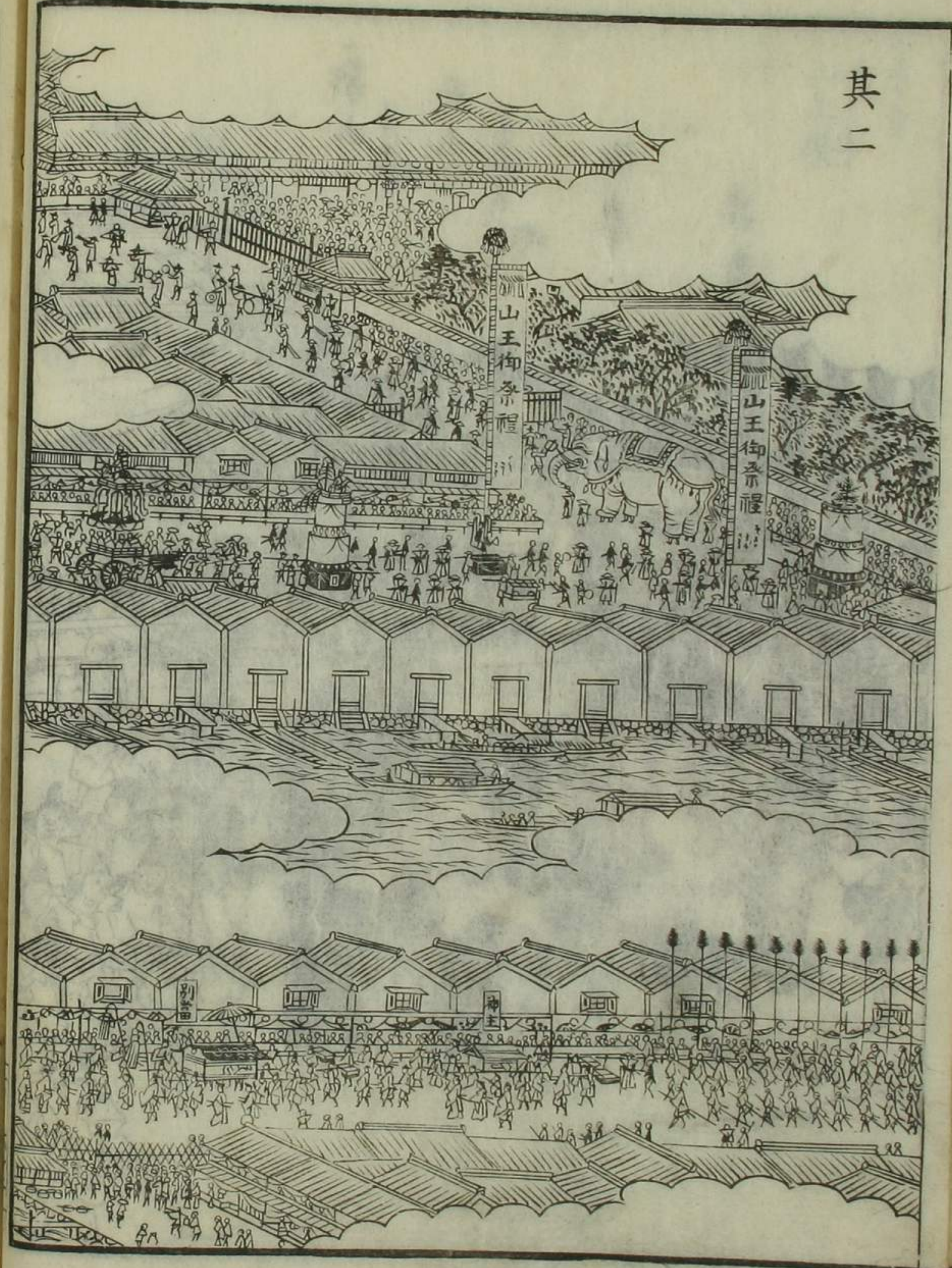
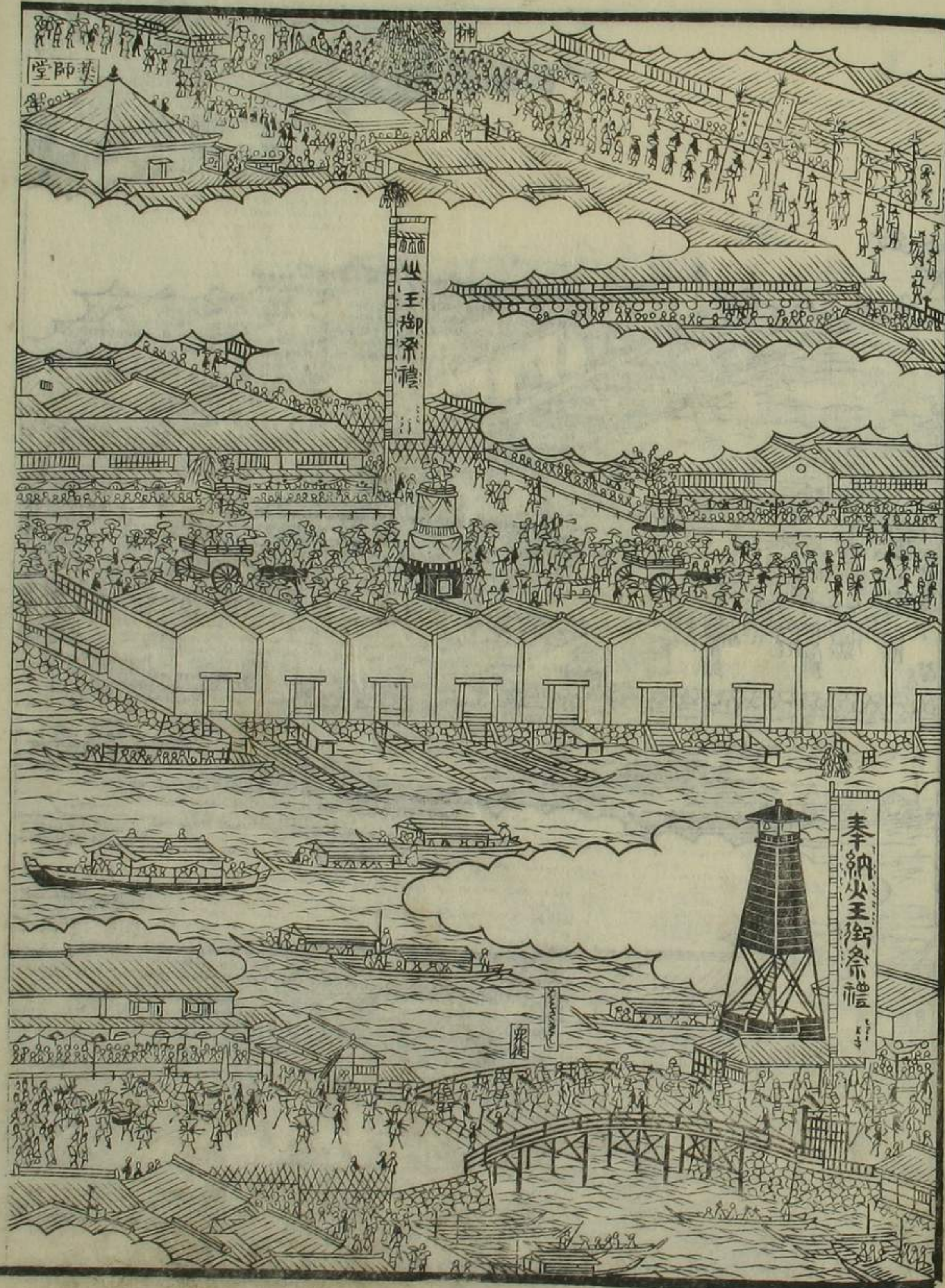
とて縁日ハ毎月八日十日
正五九月廿
午前
門前二三町の間植木の



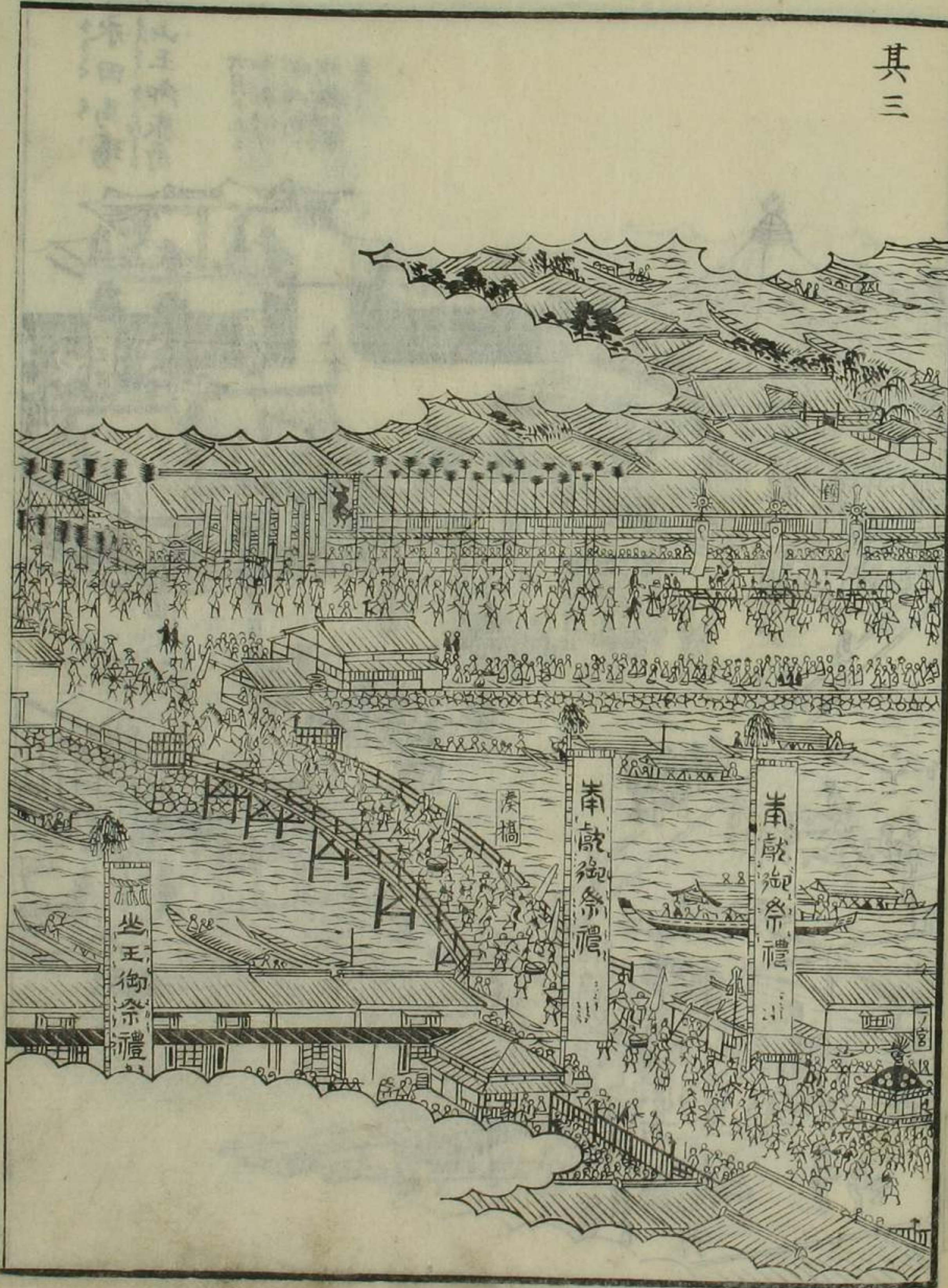
其角
 云車
 天下
 永水



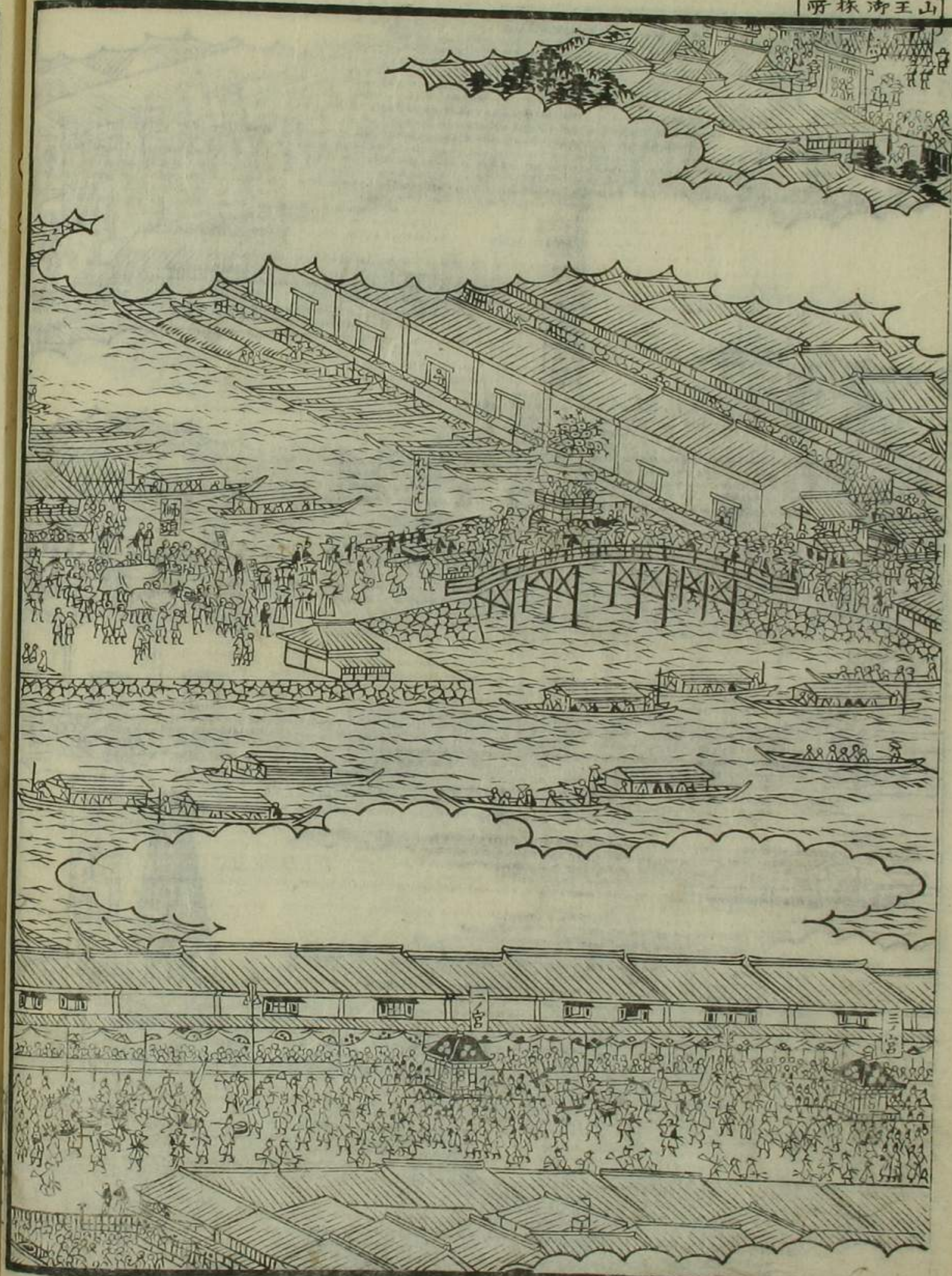
六月十五日
 山王祭



其三



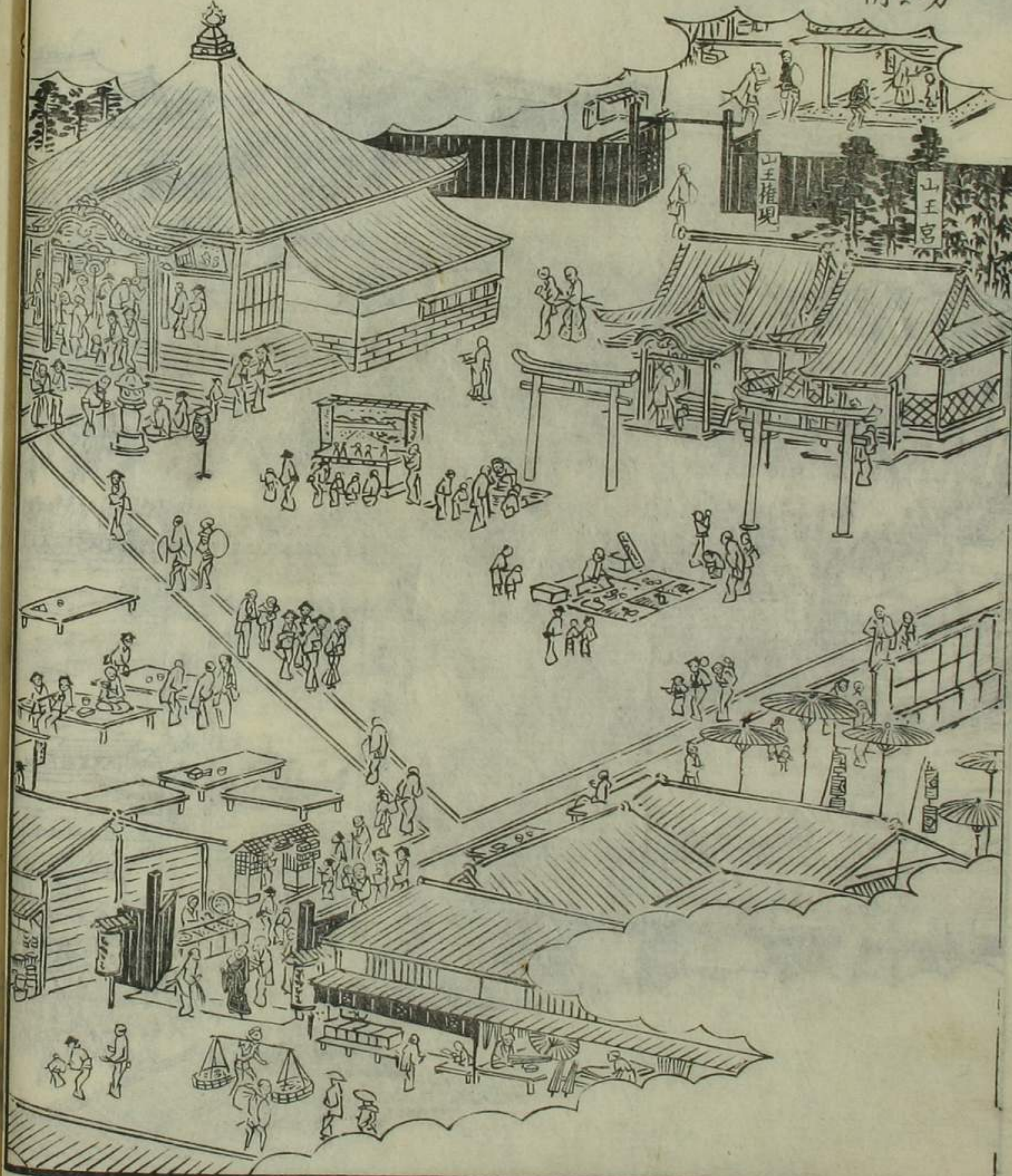
山王御祭禮



薬師堂
 薬師堂



永田馬場
 山王御旅所
 六月十五日
 神皇行幸
 御祭社





彰立^ハ別當^ハ醫王山智泉院と号^トを
 惠心僧都ハ其父母大和國高尾寺の某師佛^ニ禱^スて設^ケる
 所の靈見^{ナリ}僧都佛門^ニ入^リ後法恩^ヲ謝^セん^ト為^シ自^ラ此本
 郷を彫刻^{アリ}高尾寺^ニ安置^セれ^ル遙^クの後相州大場
 村^ニ遷^リて然^レ慈眼^ニ大師東叡山^ニつ^ク此地^ハ
 大城の東^ニ位^ニあ^リ山王^ハ本地佛^トあり^テ安置^カ
 せ^ラる^{ナリ}

天満宮 同境内^ニあり^テ社司諸井氏奉祀^トを
 幅中^ニ寛永年間^ニ神宮^ニ奉仕^スの春日局^ハ大樹^{アリ}拜受^セれ^テ山王の
 神主^ト吉右京進^ハ附^クあり^テ後諸井氏請得^テて^テ勸請^スる^{ナリ}
 類柑子 北の窓
 我栖北隣^ニ荊萩^ノ藪^ニ生^ク阿^ナる^地あり^テ茅場町^ニ
 名^ハゆれ^ク昔^ハ海^ニ色^ナり^シと今^ハ菜^ハ行^ハぬ^ル一^ニ
 至^ル極^ノ現^ノ津^ノ核^ハ空^ニの^某師^佛立^テあ^リ堂^ノの^中

たはらの^ハ繪^ハか^ラる^ニて^テ地^ヲを^カく^テ池^ヲを^カく^テ
 深^ク引^ル人^ハあ^られ^ハ夢^ノ心^ニ穂^ノよ^シの^ハし^キり^ト第^一木
 色^ハつ^クる^ニて^テ虫^ノの^ハま^まを^カく^テた^ハら^シ此
 空^ニあ^らる^ニて^テ中^ノ畧^ハあ^らる^ニて^テ夏^ノあ^らる^ニ
 川^ノり^りす^ハ布^ハ美^シく^も道^ハを^カく^テま^まを^カく^テ
 な^ハ娘^ノの^ハ口^ヲを^カく^テあ^らる^ニて^テあ^らる^ニて^テあ^らる^ニ
 と^ハあ^らる^ニて^テあ^らる^ニて^テあ^らる^ニて^テあ^らる^ニ
 毎^日を^カく^テあ^らる^ニて^テあ^らる^ニて^テあ^らる^ニて^テあ^らる^ニ
 下^ノ畧

俳仙^堂晋齋^其角^翁宿^茅場^町某^師堂^の辺^也と^ハい^はれ^タる^元禄^の
 末^ニ住^ミ即^チ終^マ焉^の地^{ナリ}
 按^テは^橋の^中に^ある^ハ森^生の^中に^ある^ハ其^角翁^の住^ミの^地と^ハい^はれ^タる^元禄^の
 祖^傳先生^居宅^地 同^所植^木店^ナり^とハ^いは^れタ^る先生^一号^と護^園と^ハい^はれ^タる^元禄^の

護ハ萱と同一字義ありハ称せられありあり月々此地に住せられしり知るし

伊雜太神宮 北八町堀松屋橋より一町を隔て良の方塗師町代地

町屋の間はあり 當社あり磯辺横町と呼はし 土俗磯辺太神宮といふ

伊雜の御神ハ天照皇太神宮の別宮あり祭神ハ伊佐波登

美命と玉柱屋姫命二座なり寛永元年甲子伊勢長官出口

市正某伊雜宮より移しまねせ通三丁目宮社を営り

今神明長屋と 同十年癸酉今の地へ移しちまるとのし例祭を

唱ふハ則是之 六月廿六日は修行也

三ツ橋 一ツ所は橋を三所架せしあるあり呼はし北八町堀より本材木

町八丁目へ渡ると彈正橋と呼はし 寛永の頃今の松屋町の角は島田本

材木町より白魚屋鋪へ渡ると牛の草橋といふ又白魚屋敷より

南八町堀へ架せしと真福寺橋と号するなり

靈巖島 箱崎の南はあり 町教今十八 昔雄答靈巖和尚此地の海

汀を築立く梵宮を営く 靈巖寺と号く 依り後世靈巖島といふ

島とよひしあり東海道名所記にまの島も江戸の 地名起り初ハ江中

地とされし東の海中へ築出 島なりと云云 後世寺と深川へ移

されしと跡を町家となしあり故は此地の北の通りあり

茅場町へ渡る橋を灵岸橋と号けり

隨見屋鋪 同所新川一の橋の北詰塩町の辺其舊地ありと云

此所は瀬戸物屋多く住せり茶碗 川村隨見ハ諸國の水土を考ふ

鉢店とも号く或隨見長屋ともあり

さ小精しあり大よせは勲功あり海を築き川を堀田畑茂開

發せ河内國の水を落さんとて 摂泉の塚は和川を堀淀

川の溢を治んとて大坂は安治川を鑿 隨見自らの実名を安治と

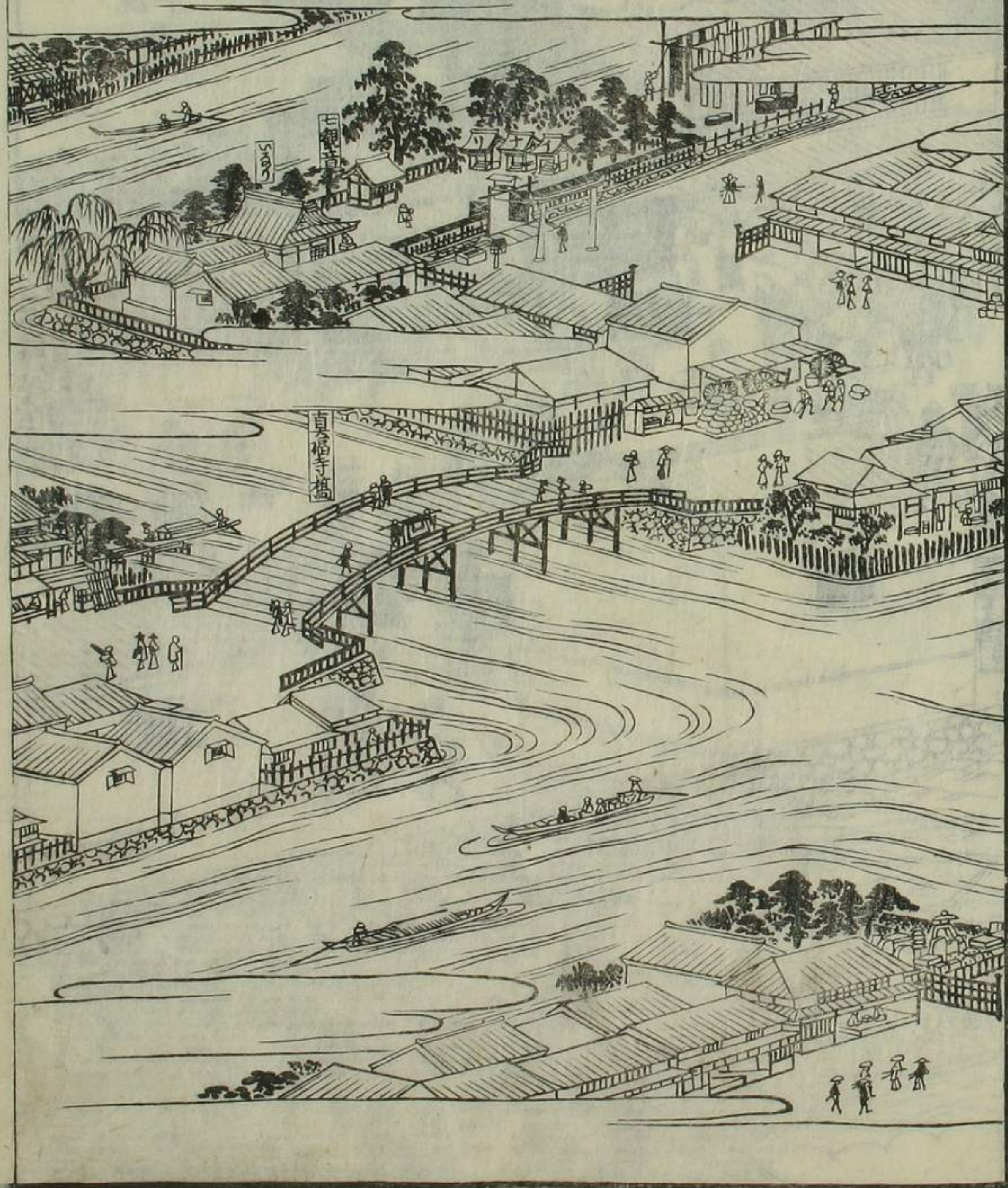
其土砂を以て川下は新よ山を築き洪水の時高波を防除くも

るをとおすと 且沖よりの目當とす 世は隨見山と稱せり 其餘の功

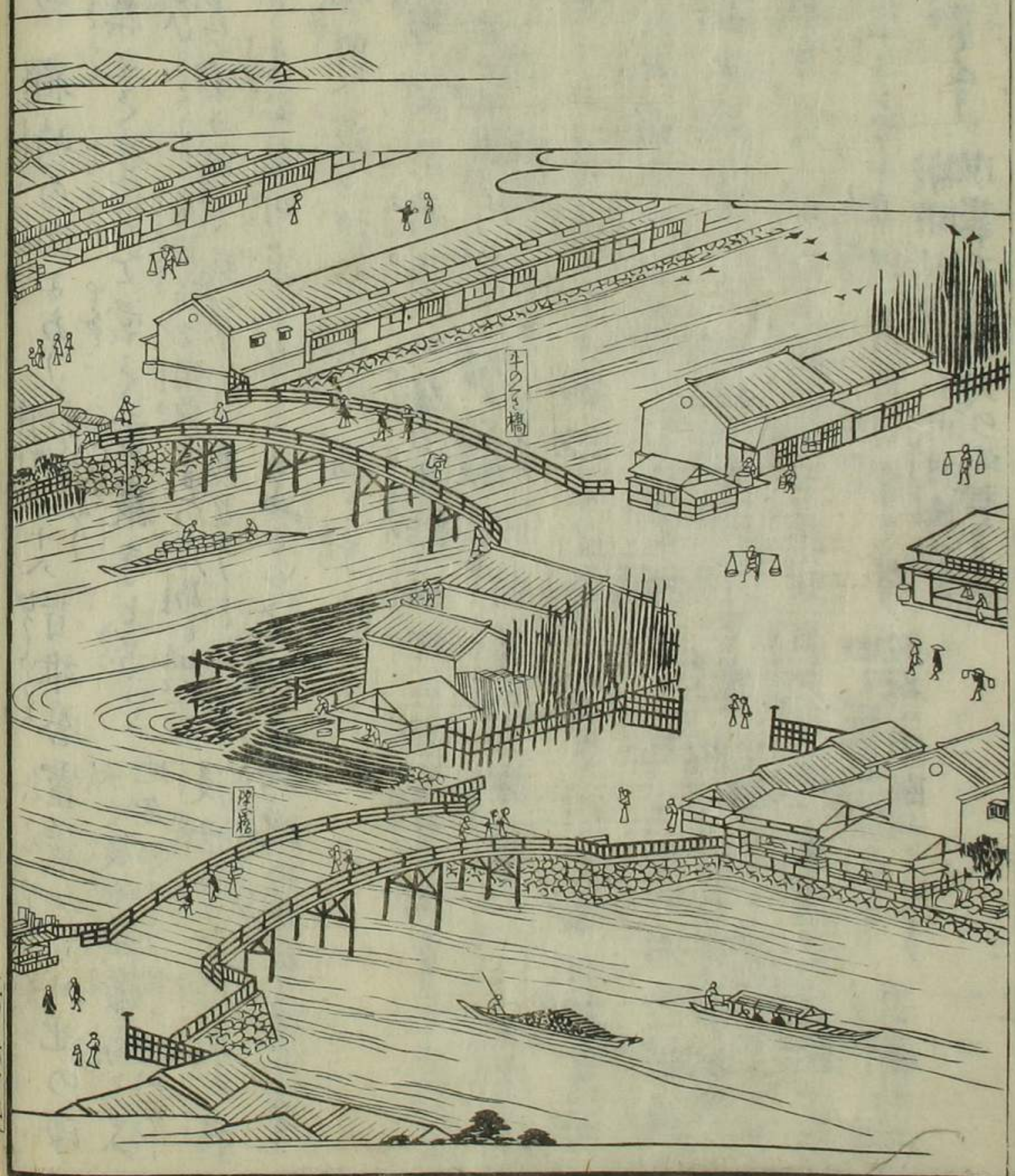
最少りす 蒔岡沾涼云く川村隨見ハ 本名ハ波除山といふ

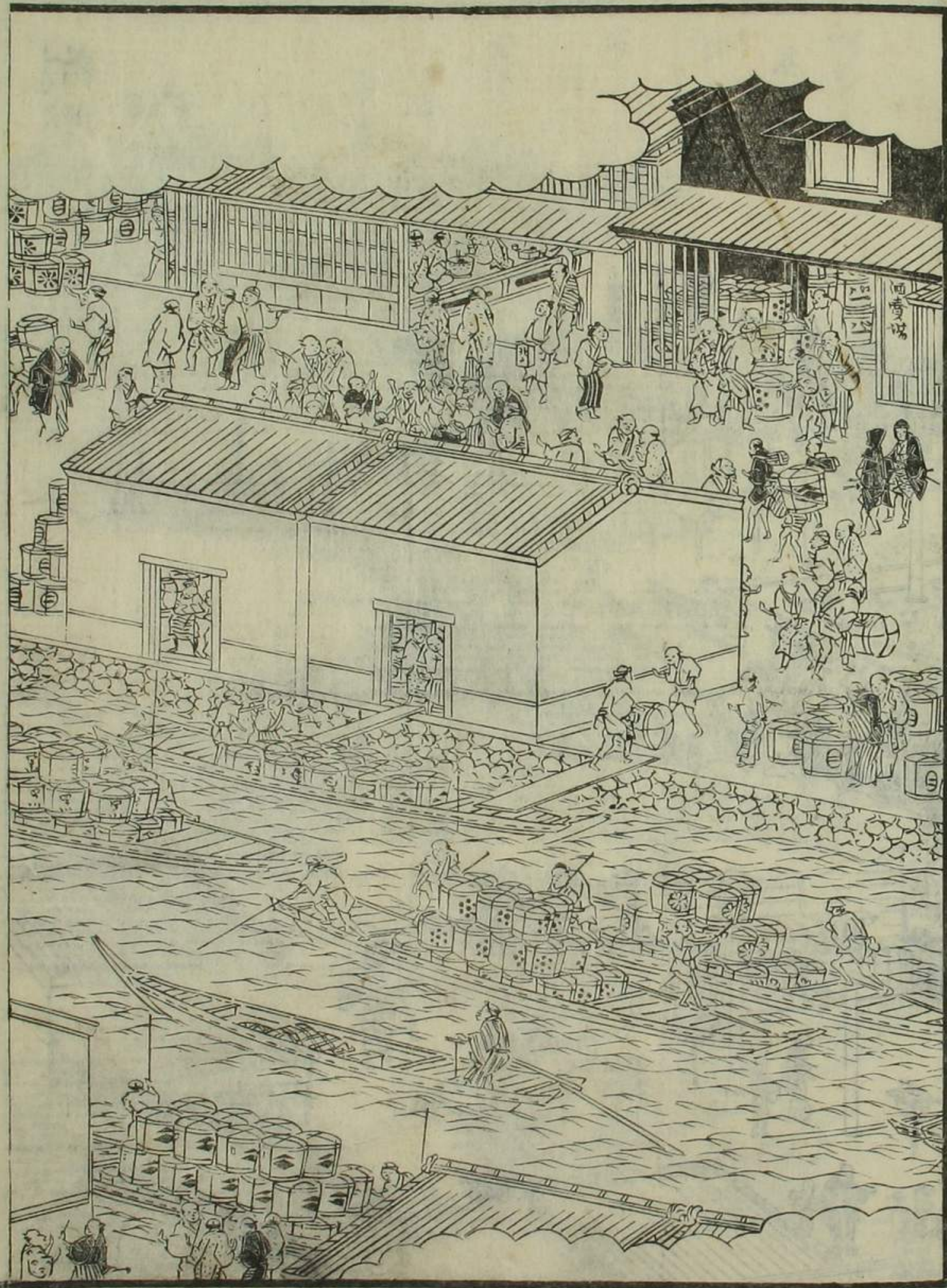
蒔岡下川村氏の始祖ありと云

風羅袖日記
 ハテ塚中
 菜の
 石の
 石の
 間
 芭蕉

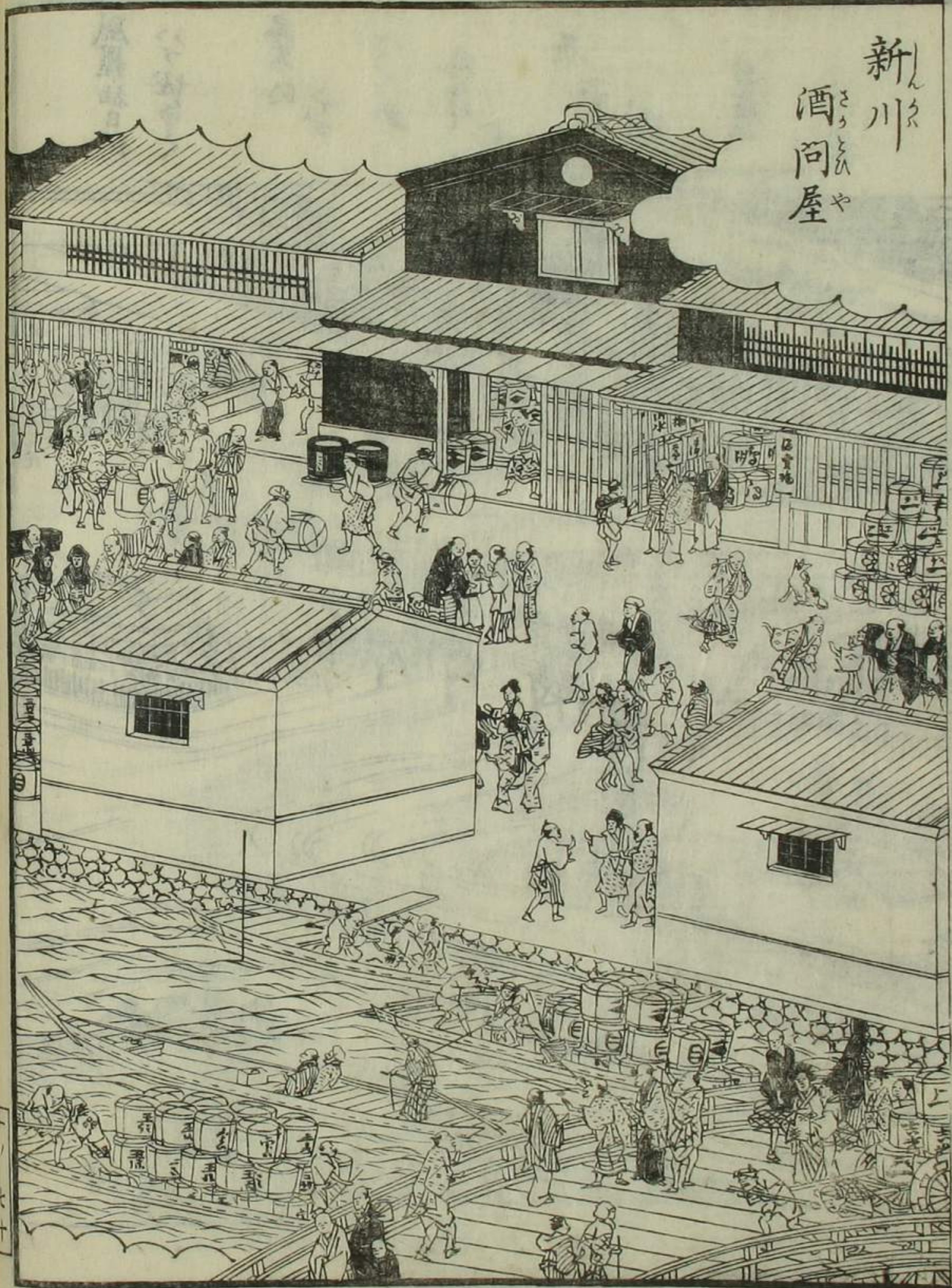


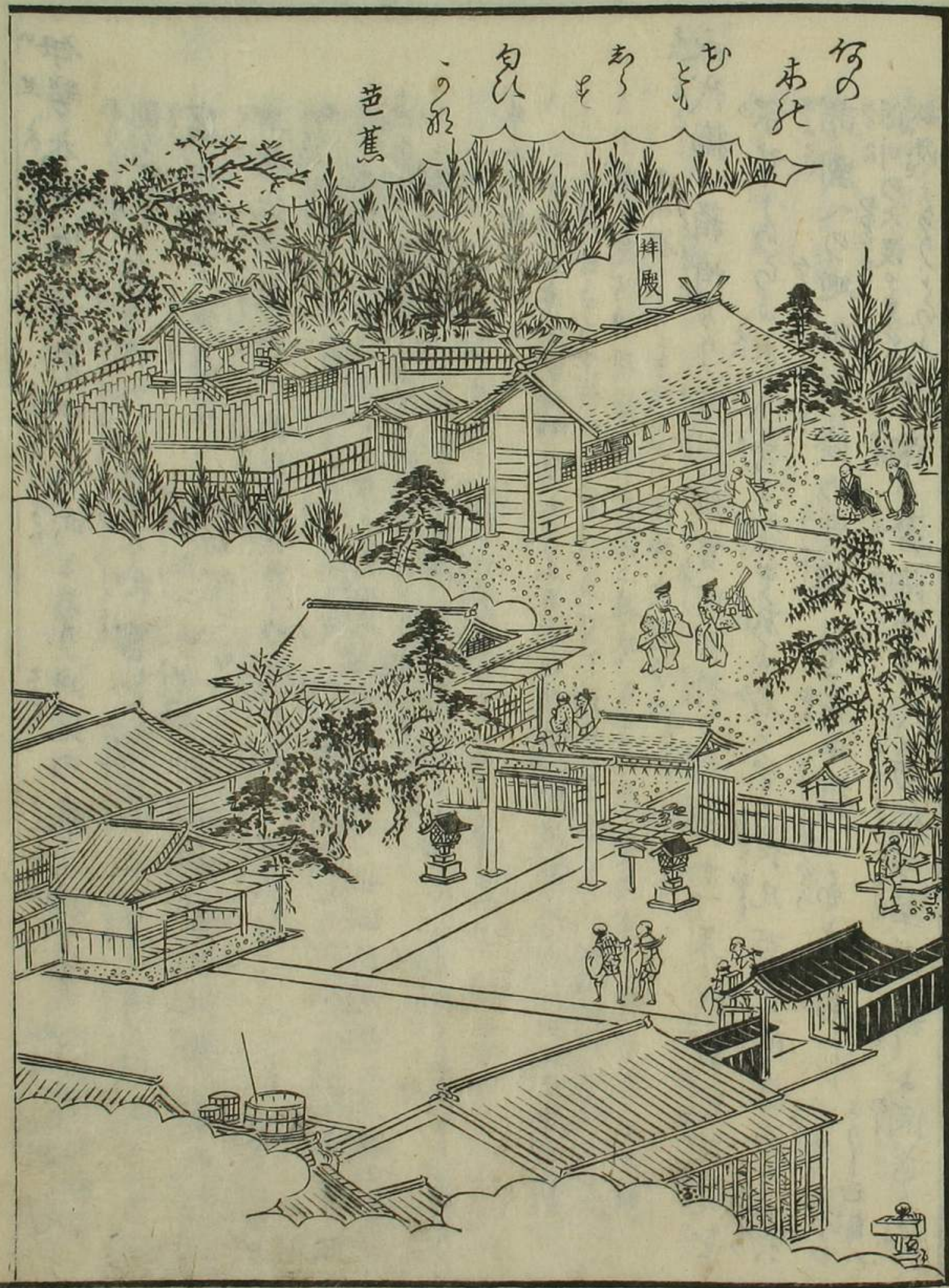
三ッ橋





新川
酒問屋





伊勢太神宮

同所四日市町あり

此地の産土神と

此所を俗間と

伊勢内外両皇太神宮を勧請し

遷拜所と

宮伊勢と同年なり

丘尼江戸赤府の折柄旅亭の假の為

此地をあらと

御門並小比せれ紫衣を賜り

より遷御と

社僧より依り内宮の

今も彼寺の住持比立尼ハ代この家より嗣傳る

按明曆の江戸繪圖

今所謂三の丸の地は伊勢上人の屋鋪と

此上人の旅宿カ

年山紀聞云

永祿元年日記

後六月三日中山

上棟毎々今沙汰

慶光院以諸國勸進

力此上棟取り立者之内

不相應と

永代橋

箱崎より深川佐賀町

元祿十一年戊寅始て是を

架せしめらる

諸國への廻船輻湊の要津

高

深川の大渡

東南ハ蒼海

房総の翠壺斜

芙蓉

谷の白峯ハ大城の西

時筑波の遠嶺ハ墨水

臨むと

藥師堂

靈巖島銀町

別當ハ真言宗

と号す本

大宝年間

造立あり

像ハ

惠生阿闍梨

此地に遷

後靈巖寺の境内

此地あり

萬治の後靈巖寺

深川

稻荷の社

此地に殘

橋本稻荷社

同境内

此所の鎮守

社記云神像ハ弘法

大師の作

山城國伏見

稻荷明神

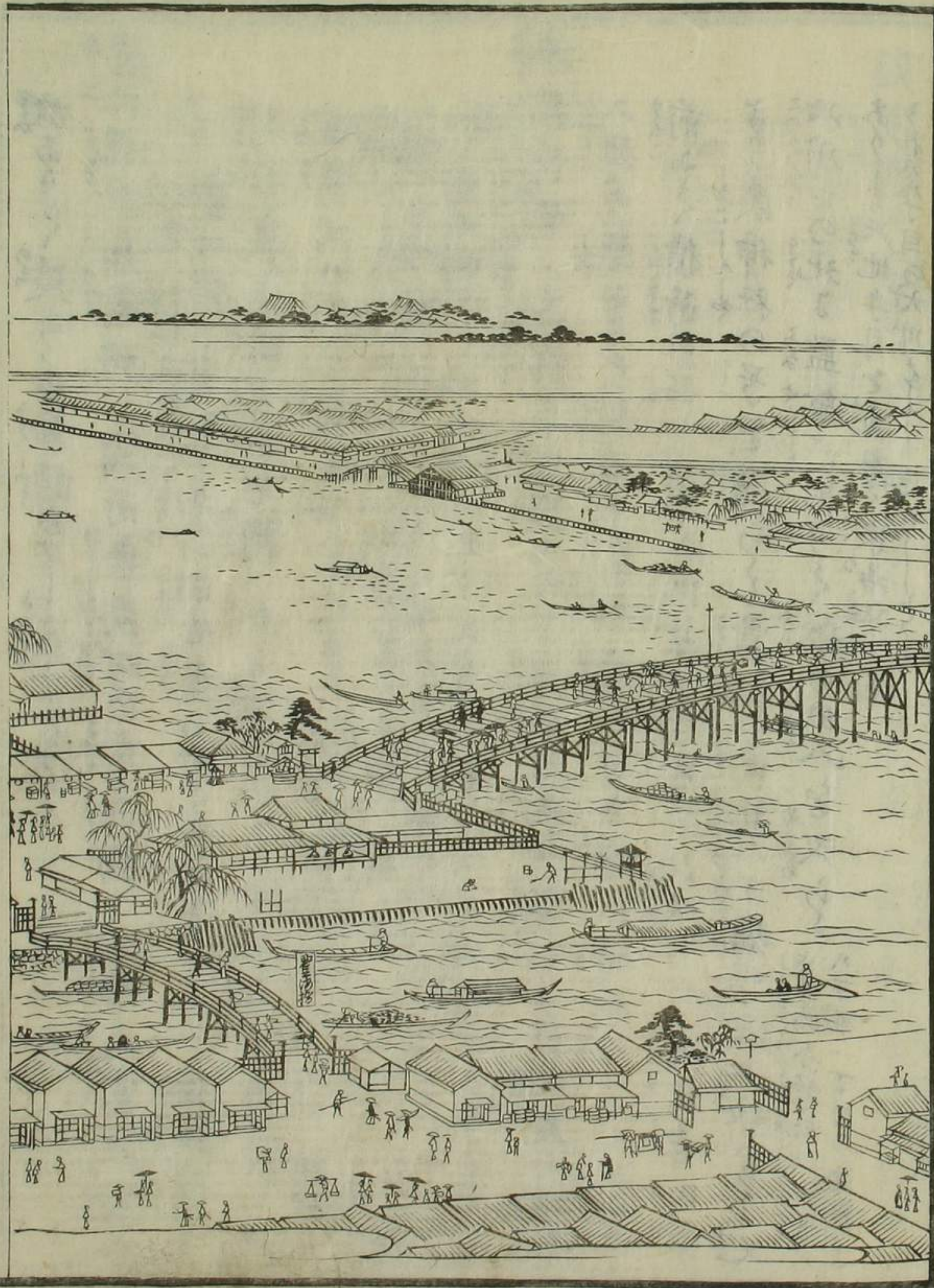
より往古

高野山の麓

橋本の里

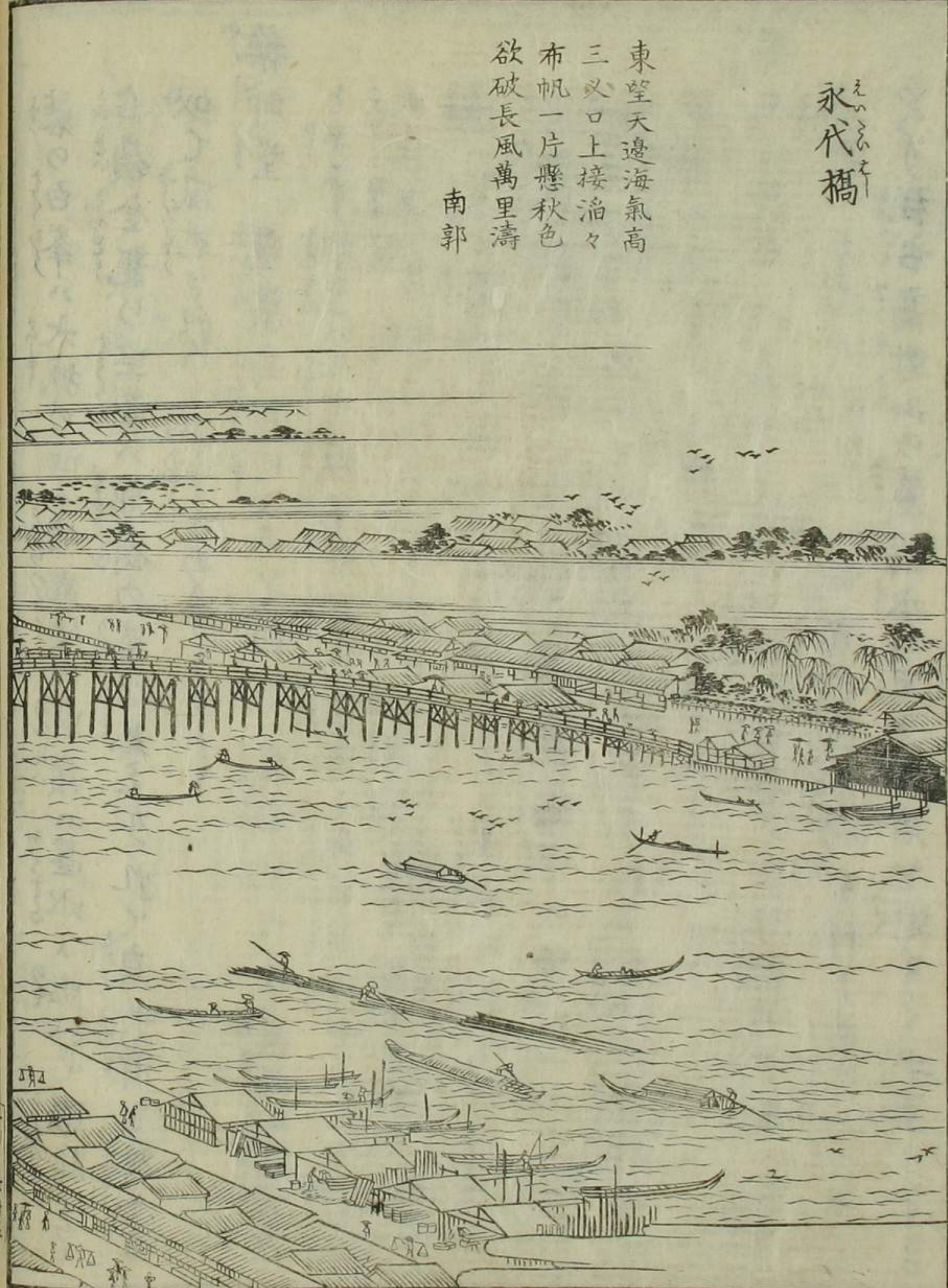
宮居を造

安置あり



永代橋

東望天邊海氣高
 三叉口上接滔々
 布帆一片懸秋色
 欲破長風萬里濤
 南郭



故ありき後ろふ勸請なり

惠比須前稻荷祠 同所東湊町の南高橋の北詰人家に

あり 別當天台宗中 昔日向井彦のやきふあまのう 海賊橋あり

引移られし頃宮居を構の外は此れとて此所をひひす

宮前又ハ蛭子前と唱へしとて 古老云く昔此地より 鏡洲築地へ

出洲のあり此辺の洲は芝海老とて多し 集る魚人字はえひの洲

と唱へ其洲崎あり 稻荷の宮ありて海老洲の宮とてよひありて

湊稻荷社 高橋の南詰あり 鎮座の由来詳か 此地ハ廻船

入津の湊ゆと諸國の商船普くろふ運ひ碇を下し此社の

前より積所の品を悉く問屋へ運送す此故也 近世吉田家

より湊神社の号を贈らる當社ハ南北八丁堀の産土神なり又

此川口の北は監船所あり船の出入を改ら 事跡合考云此祠昔ハ

ありし此地年月を重ねる家居住つて 八丁堀一丁目の南岸は

これハ八丁目の大川なりと述せしとて

鏡洲 南北凡八町あり 傳云寛永の頃井上稻富ハ

大筒の町見を試し石なりと或此出洲の形状其器に似たる故の

号ありしとて 白石先生の説は此地ハ明暦火災後小栗山傳を傳某を

記せり 今ハ薪炭石杯の問屋多く住せり 又故家珍産の舊圃新

おゆる月ハ世界の浹地洲のやうやくを伝へぬく 半井

半井ト養翁居宅地 同所明石町の裏通あり 或人云延宝九年

敷ハ父ト養の時賜つたありと云云 寛文江戸繪圖ハ十間町の 半井ト養翁ハ

西の裏通り裏と搦の東詰の北の方川は傍る角に記しあり 半井ト養翁ハ

東都の醫官なり 牡丹花肖拍の裔孫なり 連哥ありひ

狂歌を能せし此地を賜り 頃の口まゝとて

ト表ハ本道とて思ひ ふうとてあそびとてあそびとてあそび

按ふ江戸砂子ト養の源とてれとも 哥意ハ他の人の詠さうかく不審あり

了然禪尼菴室地 此地ハ住まへり 紫の一本とて草紙に

んぞとて 禪尼の行實ハ弟四巻落合泰雲寺の条下に詳なり

佃島 鑊炮洲は傍ら孤島を以て舟松町より舟渡文龜年間江戸

の舊國は向島とあり天正年間

東照大神君遠州濱松の御城ありし皇都へ上りて頃攝津

國多田の御廟あり住吉大神よりてありて神崎川涉船

なりし小佃村の漁父獵船をこきゆりて渡りし伏見

御城小まゝ向を時も涉膳の魚をこきゆりし旨 台命あり又

西國へ使なるとの折りしハかゝる漁船を以て仕へたりし旨

命ありしハ大坂兩度の御陣も軍吏の密使或は涉膳の

魚獵等の日々急なく仕へたりしハ後漁人三十四人江戸へ

ゆされ慶長年間浅草川涉遊獵の時網を引せり同十八年

八月十日海川漁獵を旨免許なりしあり

其頃迄ハ安藤石川

難波町今も交川岸と云所ありしハ佃と号けて用事あり 然も寛永年間

鑊炮洲の東の干潟百間四方の地をり正保元年二月漁家を立並へ

本國佃村の名を採て即佃島と号く又白魚を取らざる旨

台命よりし毎年十一月より三月迄怠らざる其

間ハ他の獵を堅く禁めし猶更後深川八幡宮の前より

空地三十坪をありし佃町と号けしは涉菜魚をもし

りしとされし或人の説は此所ハ始安藤右京進やきの地なりし住吉の社

貢佃島ハ紀州賀茂の漢人難屋一此地ハ殊更白魚は名あり故に

一島皆本願寺宗ありしと云 此地ハ殊更白魚は名あり故に

冬月の間毎夜漁舟は篝火を焼四手網を以て是を漁し都

下地ありし是を賞せり春に至りて二月の末よりハ川上は登り

弥生の頃子を産を其子秋に至りて七八月の頃江海は入と云

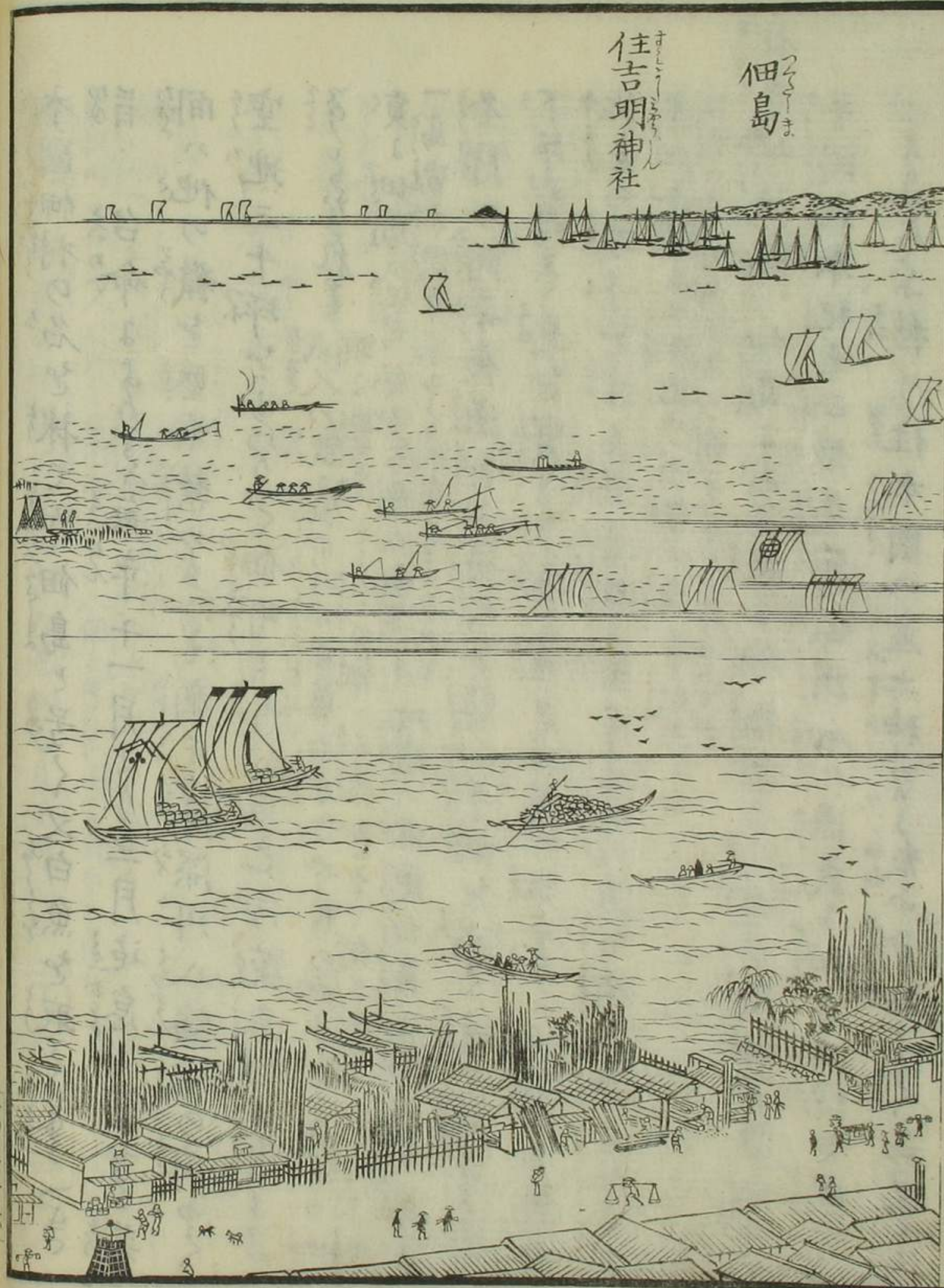
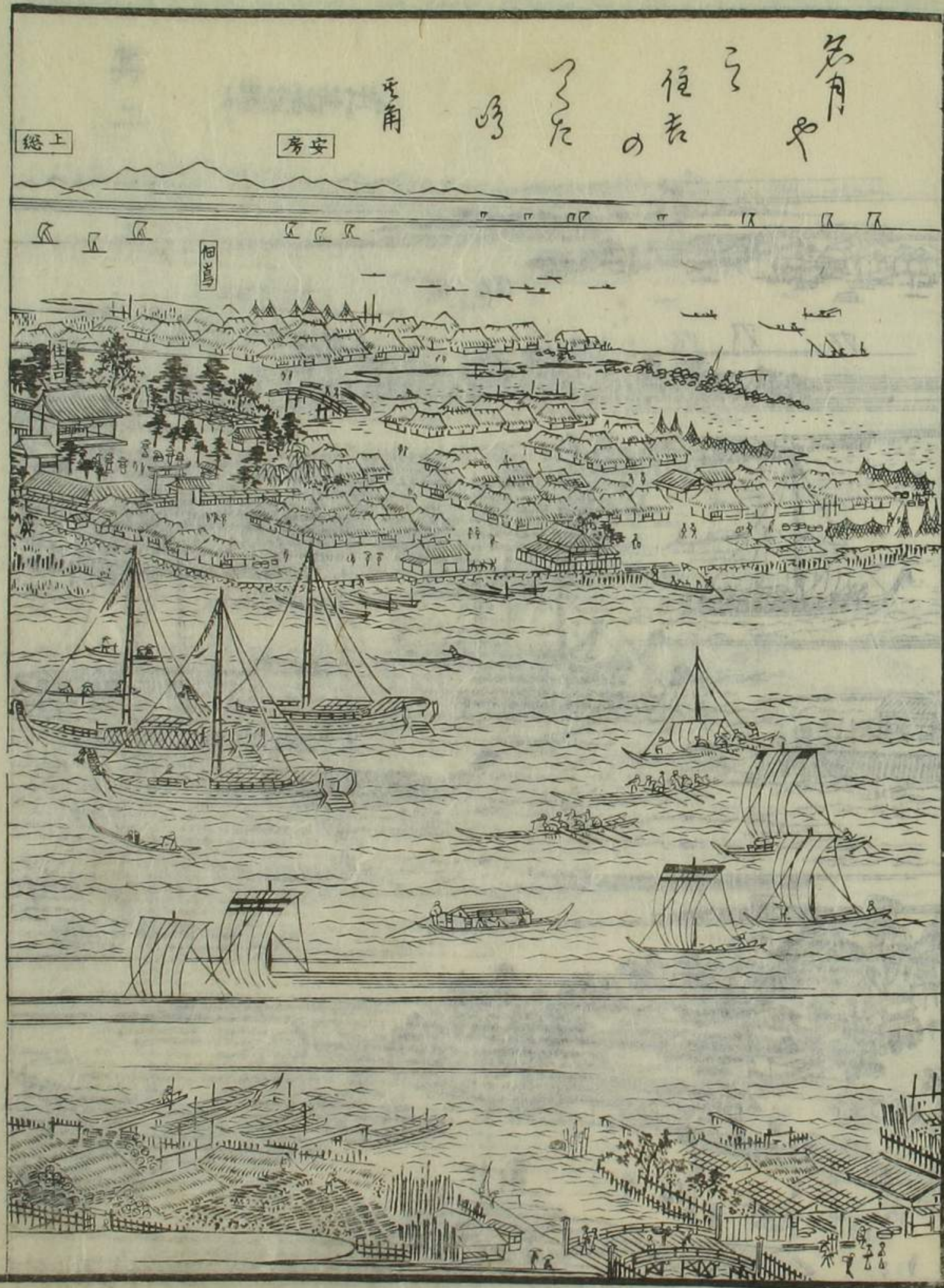
事跡合考云西國の川筋は産をこきゆりし旨

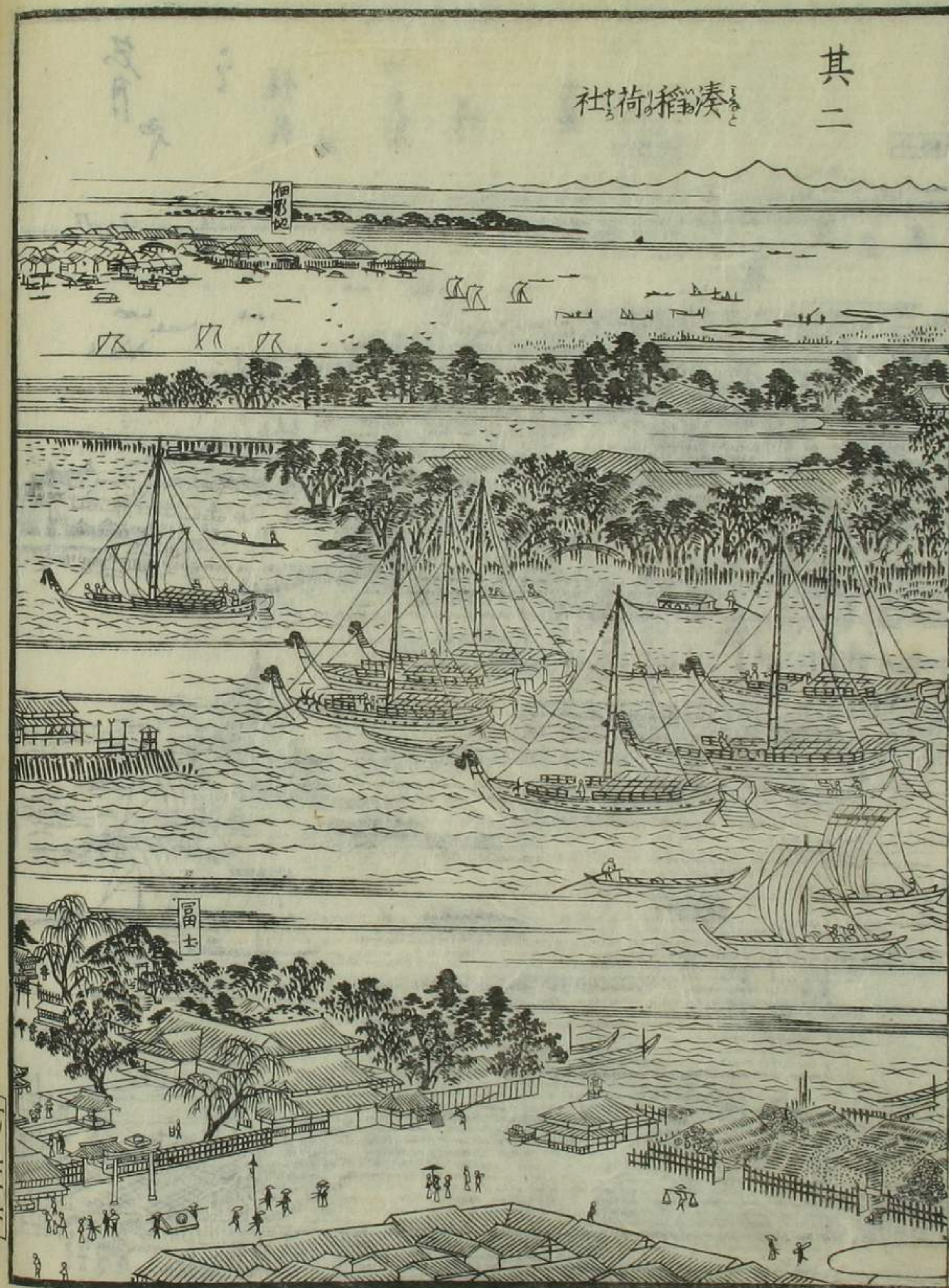
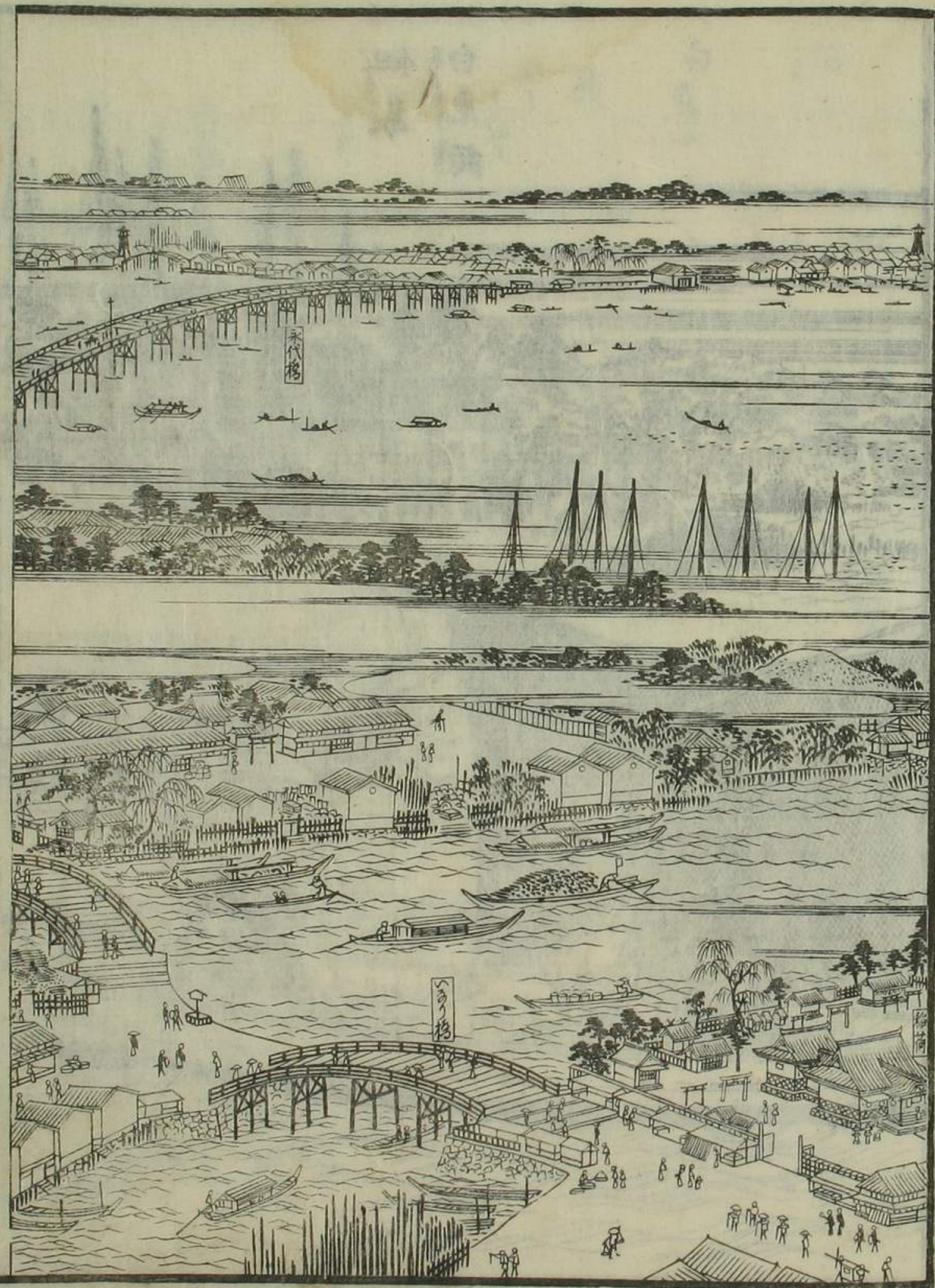
白魚ハ尾州名古屋の浦よりとりし旨ありし旨

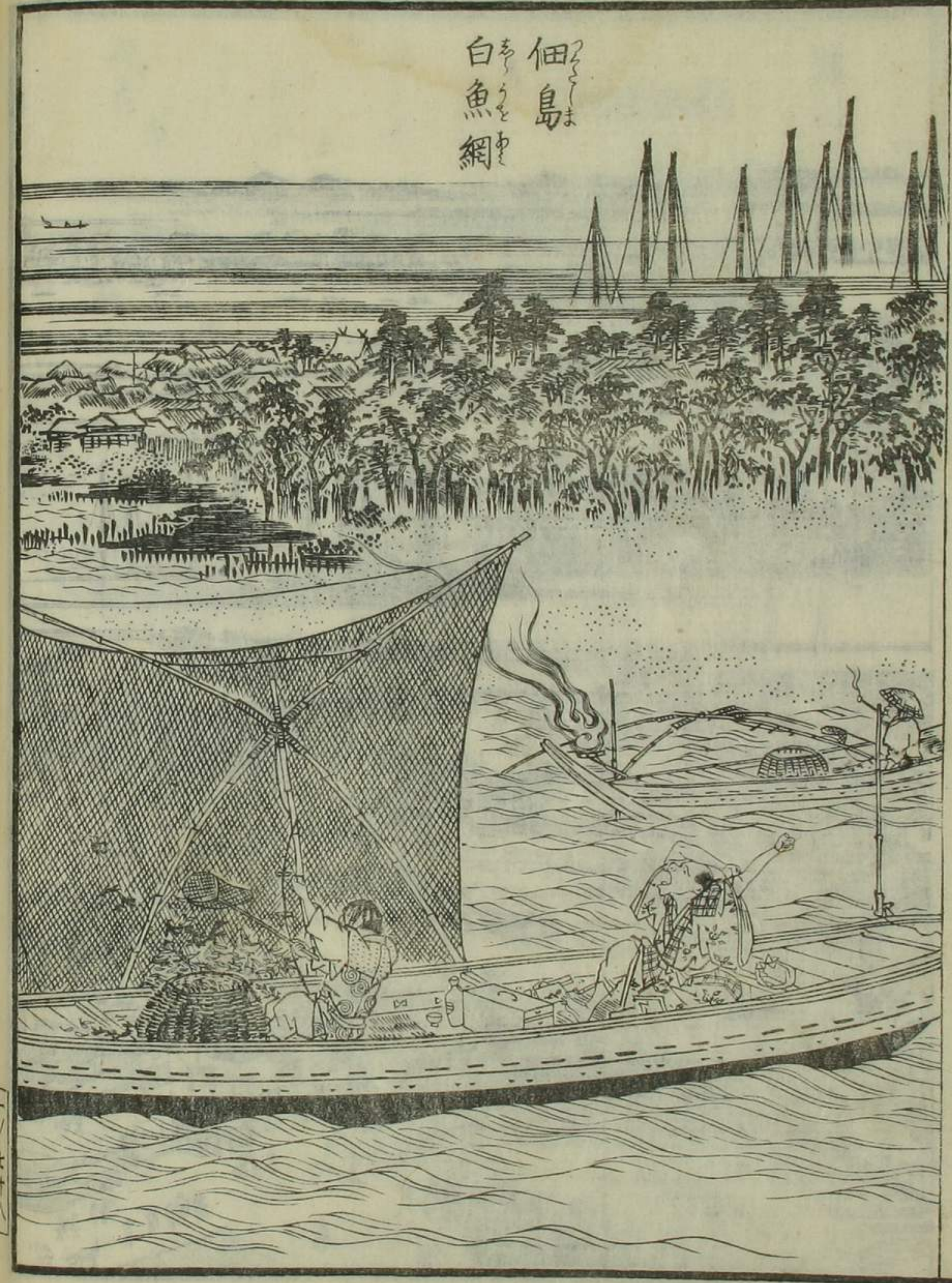
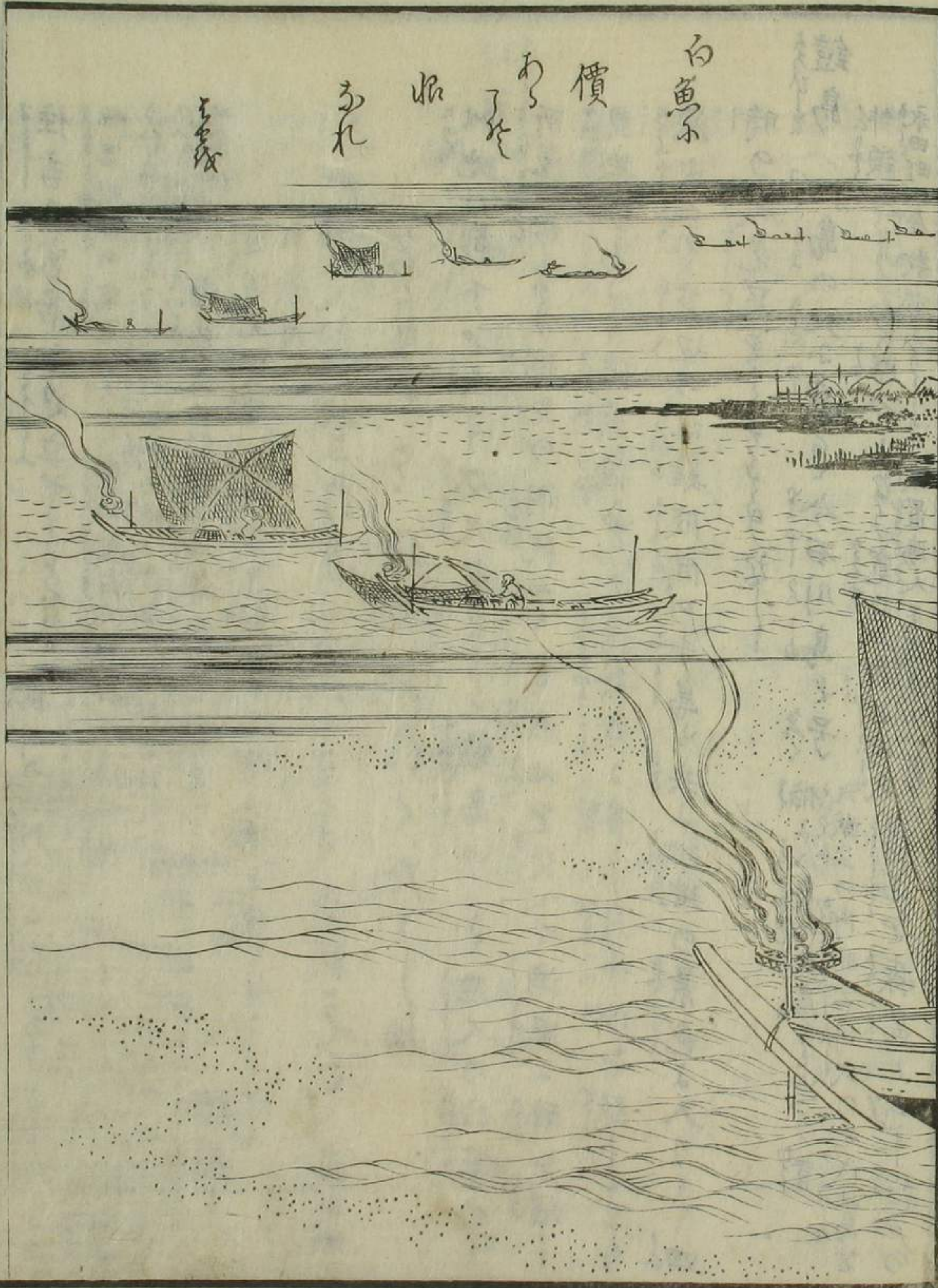
住吉明神社 佃島はあり祭る神攝州の住吉の御神は同一神主ハ

平岡氏奉祀を正保年間攝州佃の漁民は初め此地を賜り

しよりこゝに移り住本國の産土神なる故分社しとありし旨







住吉の宮居を建立せしむるなり
撰州の佃村ハ西成郡ニあり古今集ニ
住吉明神の宮居あり神功皇后三韓征伐時歸陣の時此地ニ舟の艦綱を
くけりしあり己降佃村の地ニ舟の艦綱をく
けりし當社ハ毎歲六月晦日名越被修禊あり
道遙院実隆公住吉を納和奇十首の題を詠てあり一
江上月
此浦の入りはねほは月のみあれそありとて
秋之む 舟茂晴

此地ハ都下を去る咫尺なりとて離島や
漁人の住家の
所得頗なり
彌生の潮乾や
貴賤袖を交へて浦風ニ醉を醒
貝拾ひあるも磯菜摘みんと其與殊多し
月平沙を照し
漁火白く芦辺の水雞波間の子鳥も
共ニ此地の景色入りし四
時の風光足せしむるなり

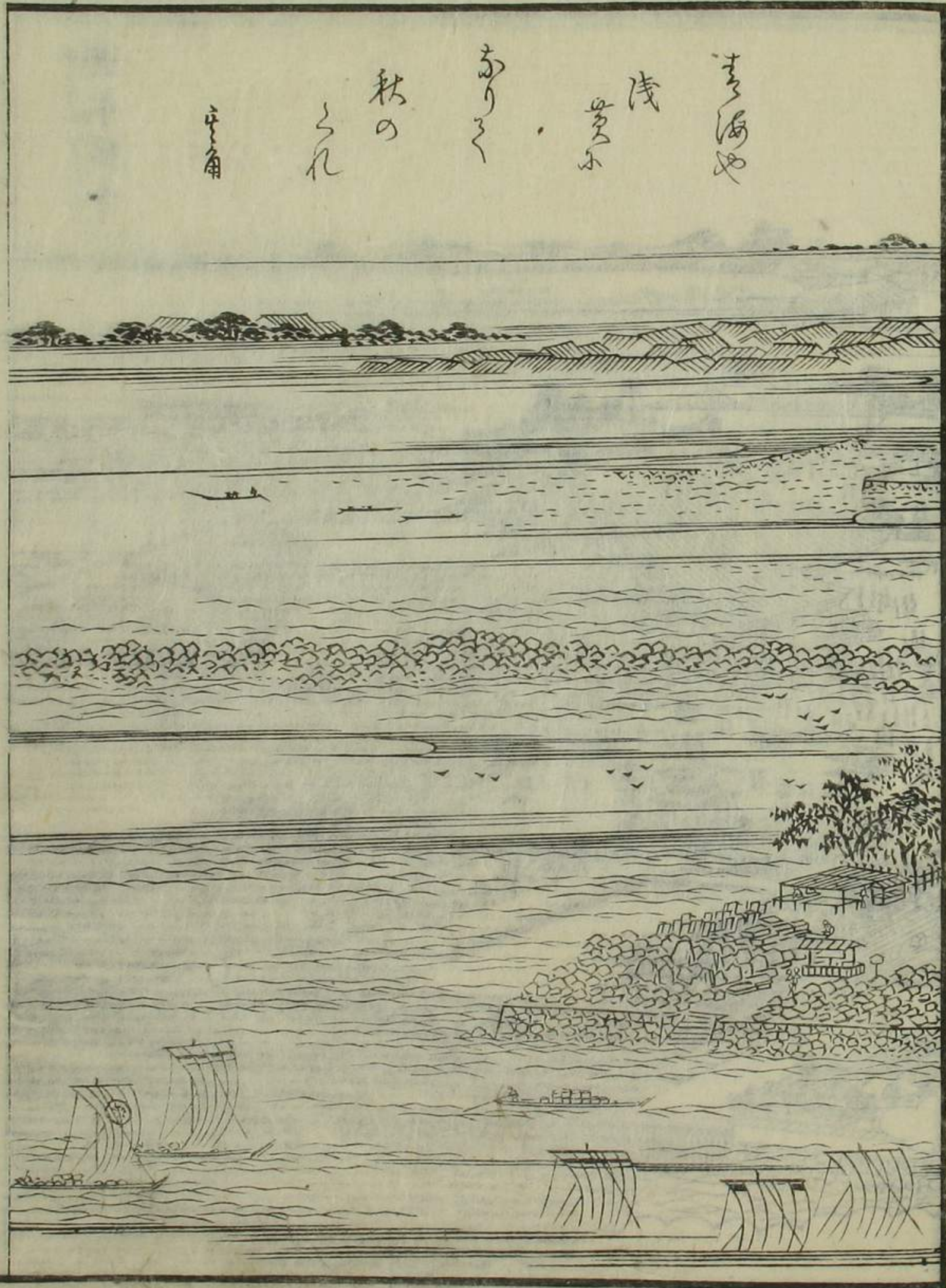
古岡ニ入るるなり
又其岡ニ記て云く此島一名を鑑島と号く
古ハ八幡太郎義家朝臣鑑と収りし神體と
八幡宮を勸請す
石川大隅守居住の時ハ其庭中ニありし
今ハ鑊炮洲稻荷
境内ニありと云
或人云昔
猷廟の時異國より鑑一領をもちりし
是を片手に持ち大樹の御前へ披露
なり感賞のありし
此地
宅地ニたまなり鑑を携へ賞と
しりし地ありし
鑑島と号け

鑑島 佃島の北に並へし今石川島と号
俗ハ八幡の屋島と号し昔
大猷公の時時石川氏の先代此島を
舊名を森島と云し江戸の
永田町へ屋敷替ありし
炭置場人足寄場ハありし

江風山月樓 築地稻葉侯別荘の号なり
寛文二年壬寅の春此所
の海江と填し土を積石を疊むて翌年
の秋其功なりと
りし風光他ニ勝れ殊ニ洞庭の秋影
やと越りたり

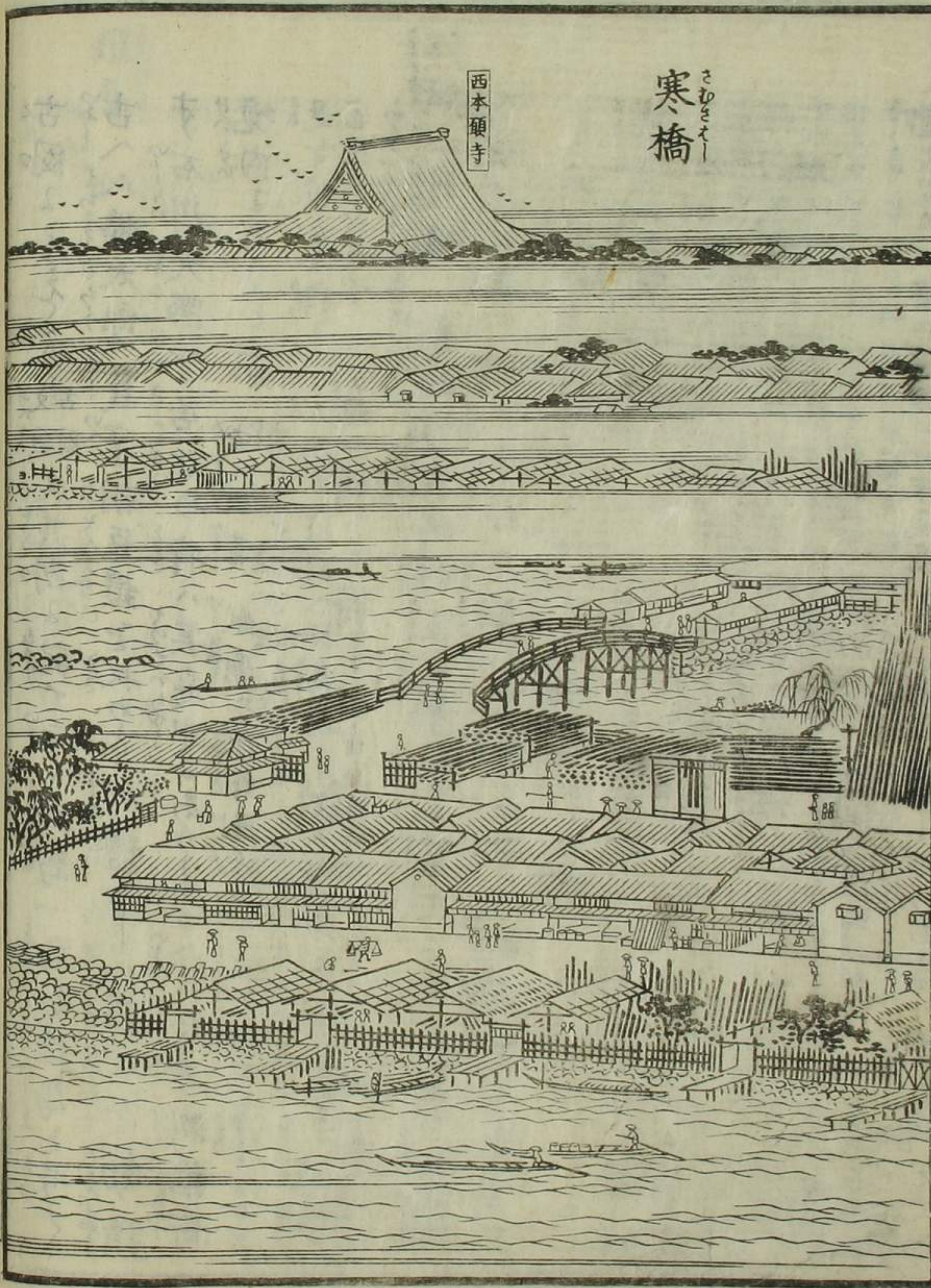
咳逆蒼姬 同藩中ニありし
二尺ばかりの石像なり
稻葉侯の始
一の草庵ニ一人の老僧の住ありし
時
邊
見
せ
れ
し
や
と
あ
る
深
山
に
お
お
し
た
り
死
後
一
度
城
入
來
り
許
し
置
か
れ
し
と
云
ふ
後
是
を
城
中
に
講
せ
ん
と
し
受
け
し
種
々
家
臣
田
崎
某
許
し
置
か
れ
し
と
云
ふ
後
是
を
城
中
に
講
せ
ん
と
し
何
人
あ
り
し
と
依
著
の
石
像
と
稻
葉
侯
累
代
の
牌
堂
に
逆
置
し
時
ハ
か
ら
し
も
著
の
石
像
倒
置
と
なり
又
著
の
石
像
ハ
口
中
ニ
痴
あ
り
の
寄
願
し
姫
の
石
像
ハ
咳
と
惱
し
の
亦

浅海
あり
秋の
これ
角



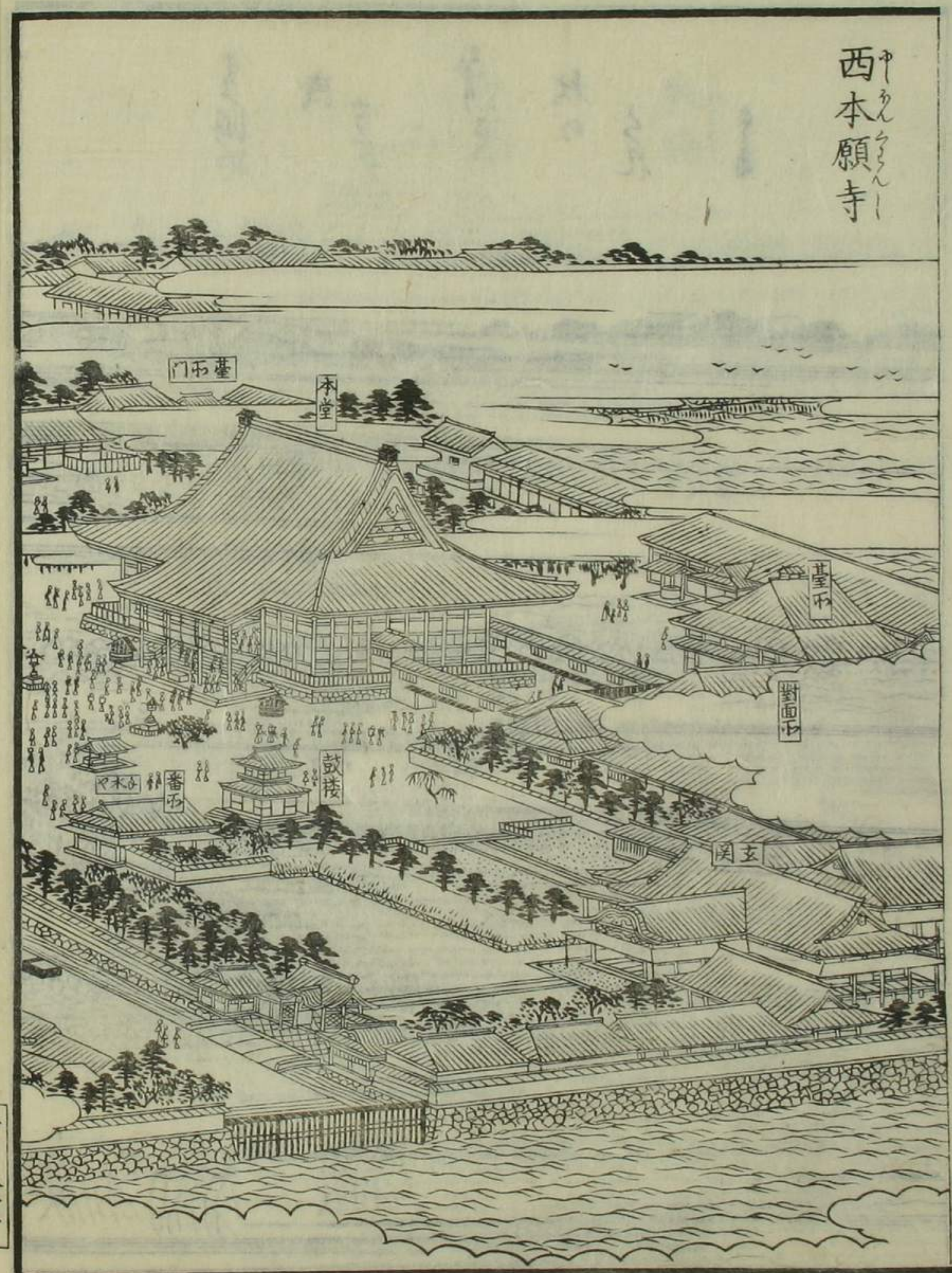
寒橋

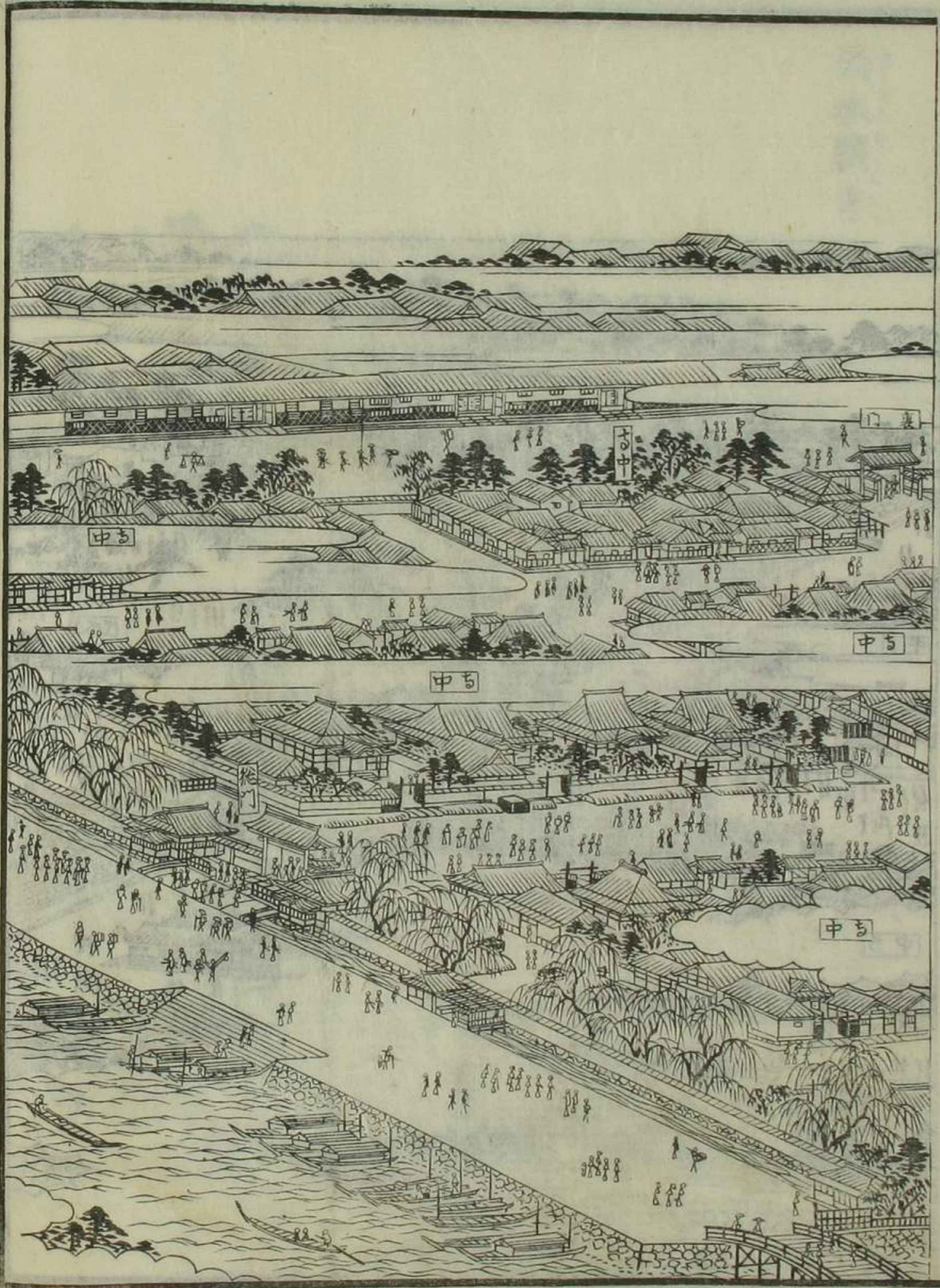
西本願寺





西本願寺
中
本
願
寺





西

本願寺

同所川を隔て北の方より俗に築地の門跡と云ふ

或人云此地ハ明暦四年の仰つて一向の所なり

裏通りふつとを明暦大火の後此地に移す准如上人を當寺の

開祖と云ふ江戶名所記に神祖所在の時より京都西本願寺の末寺と云ふ

本願寺の建立と云ふ延宝八年庚申西本願寺立とあり

太子の彫像や泉州塚の信證院よりこの寺毎年七月七日

立花會十一月廿八日開山忌あり七昼夜の法會修行あり是城

報恩講と云又俗に溝と称す塔中成勝院は俳仙松風

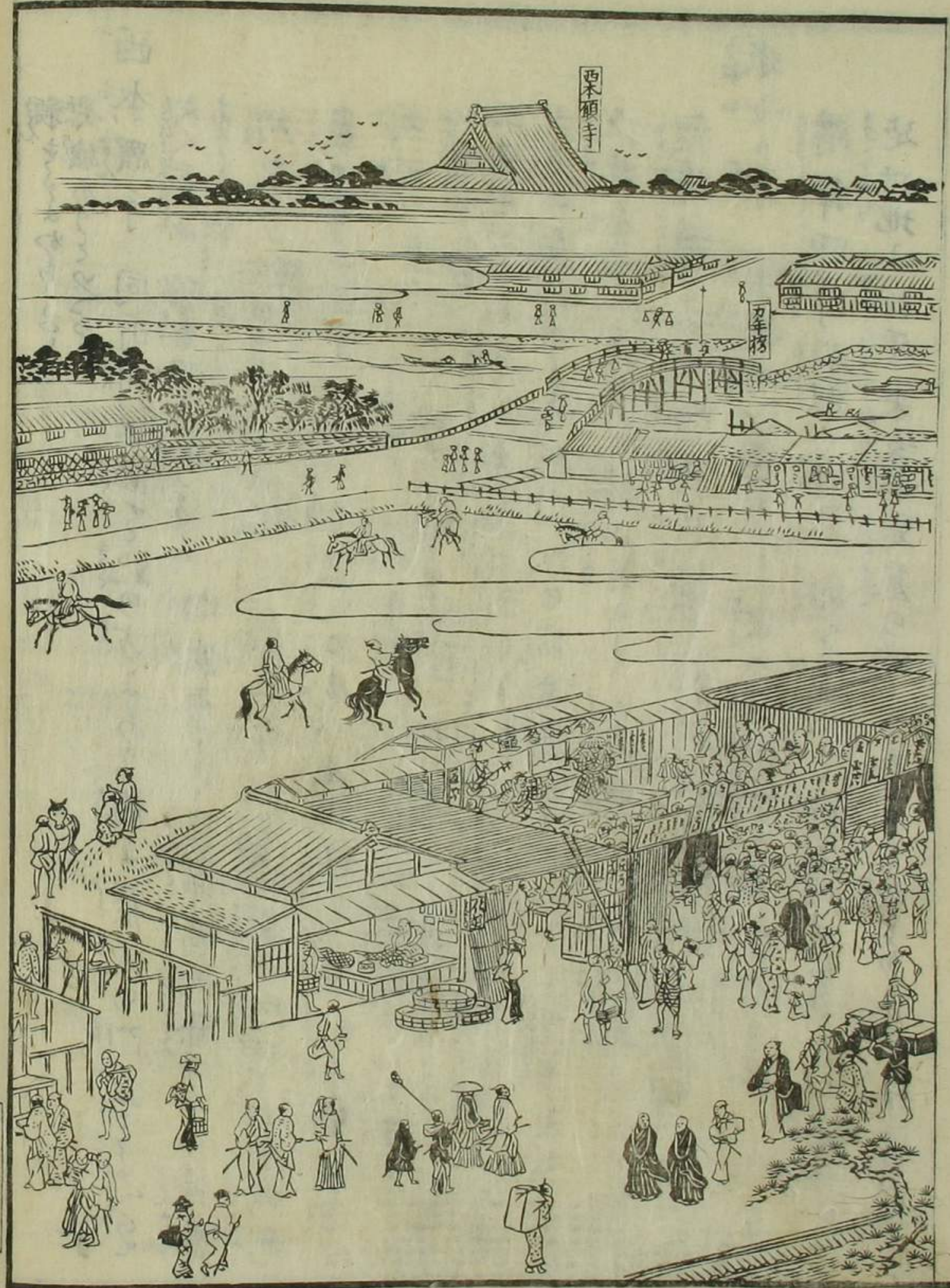
米女原木挽町四丁目より東の方此所は馬場あり常は賑しく

講釋師浄瑠璃の藝ハ軒を並つて行人の足をとむ享保九年

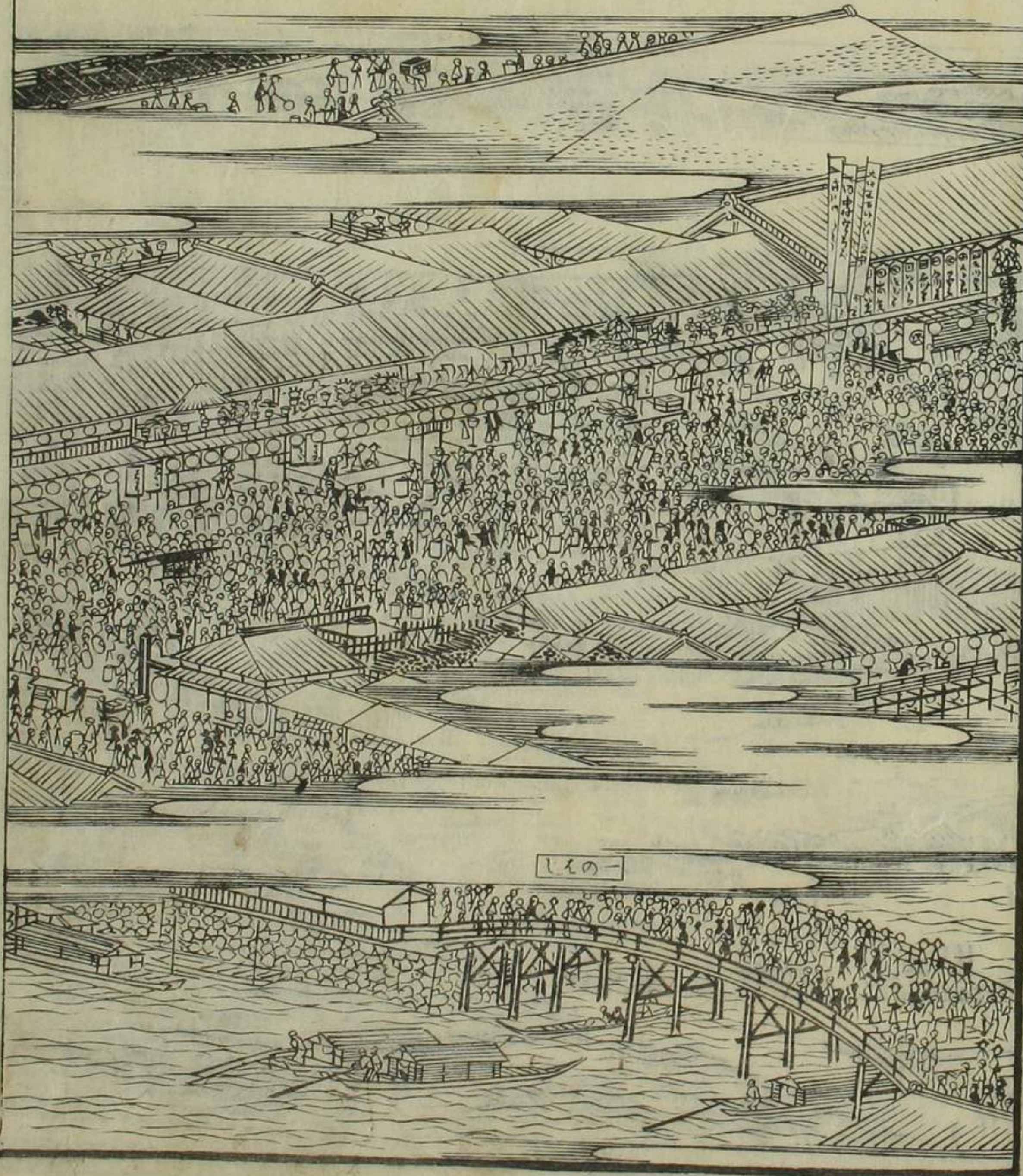
迄此地は松平米女正定基のゆきありなり同年正月晦日

同年正月晦日

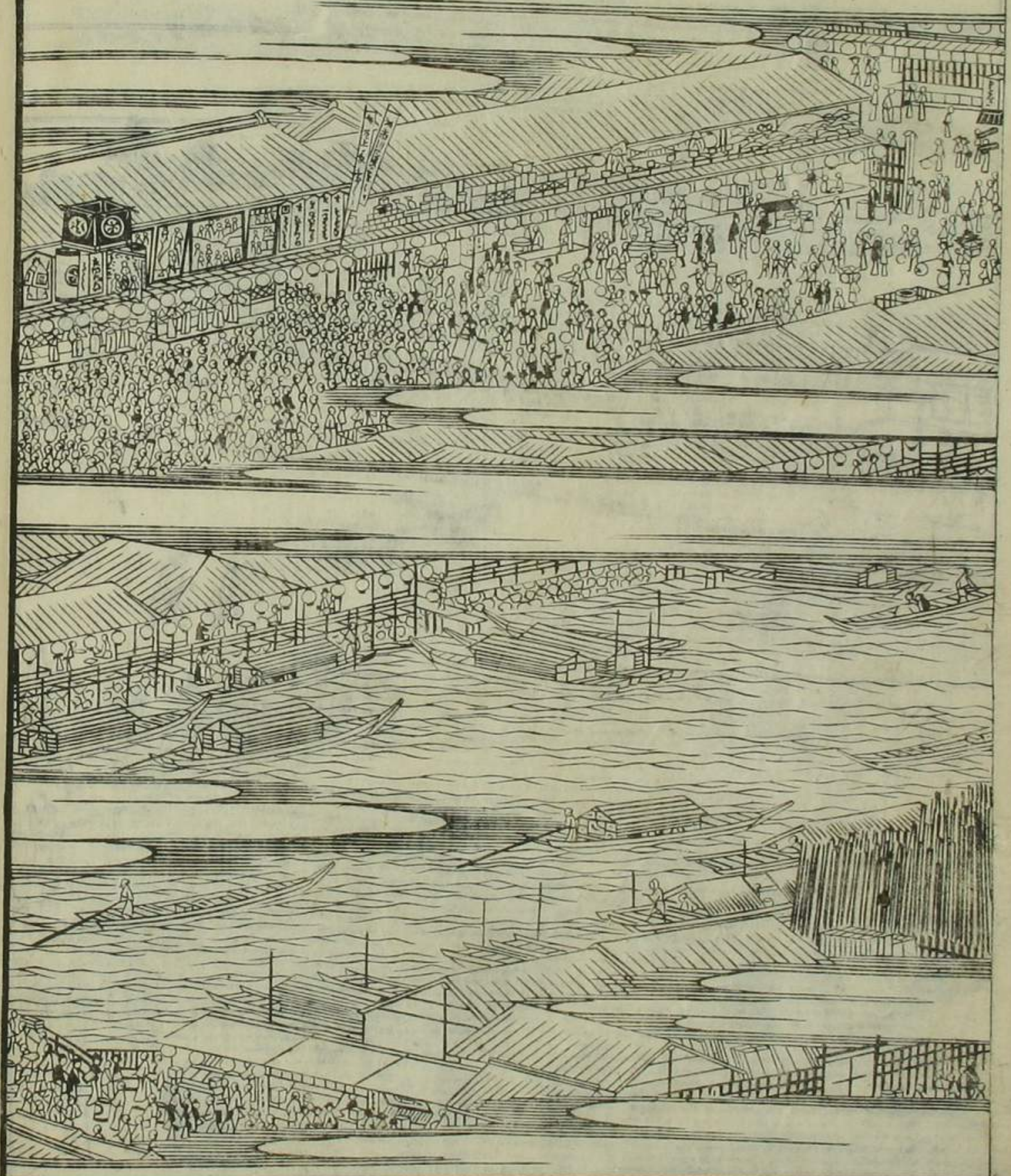
うねめ
采女
り
原

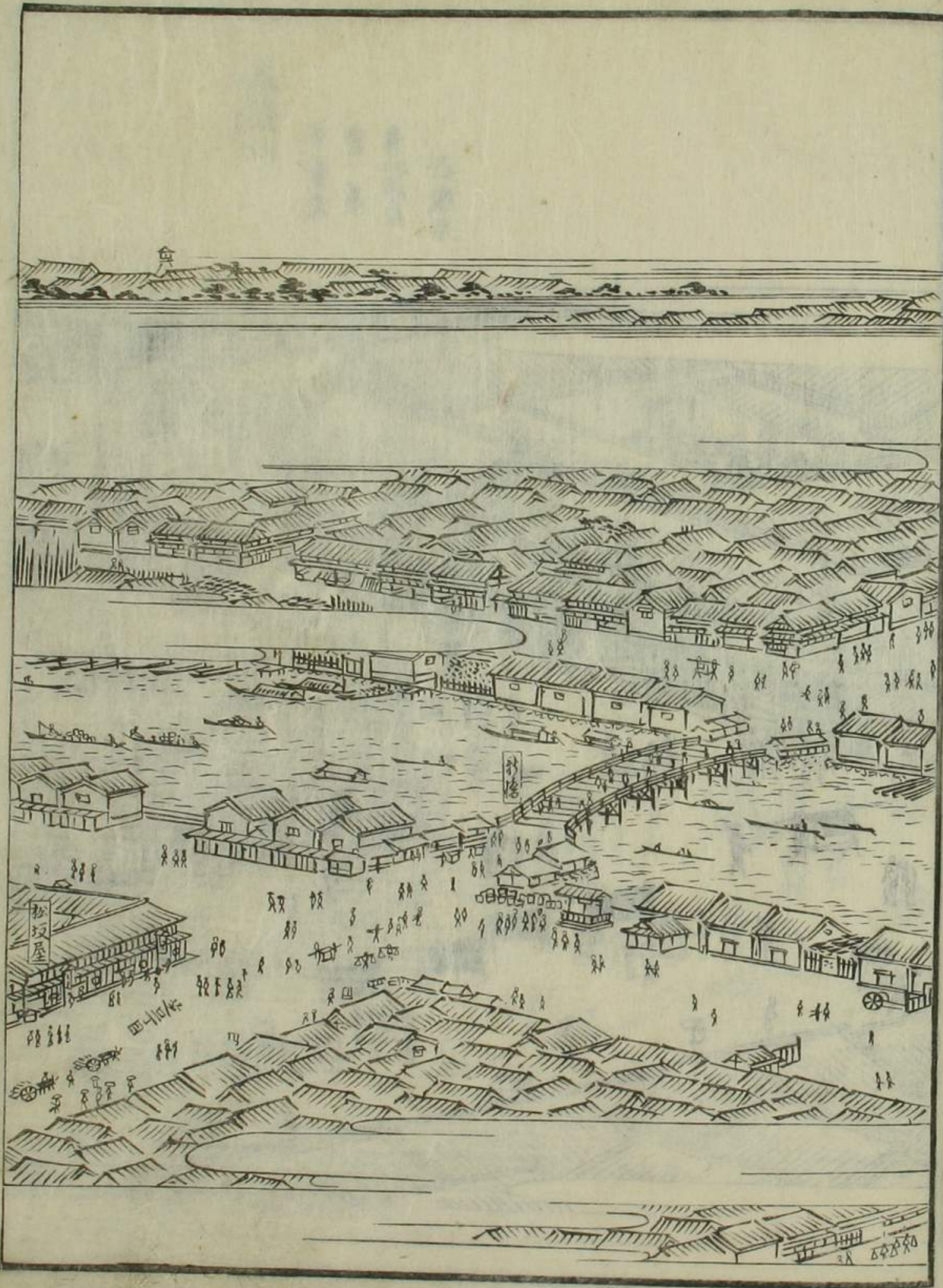


水挽町
芝居

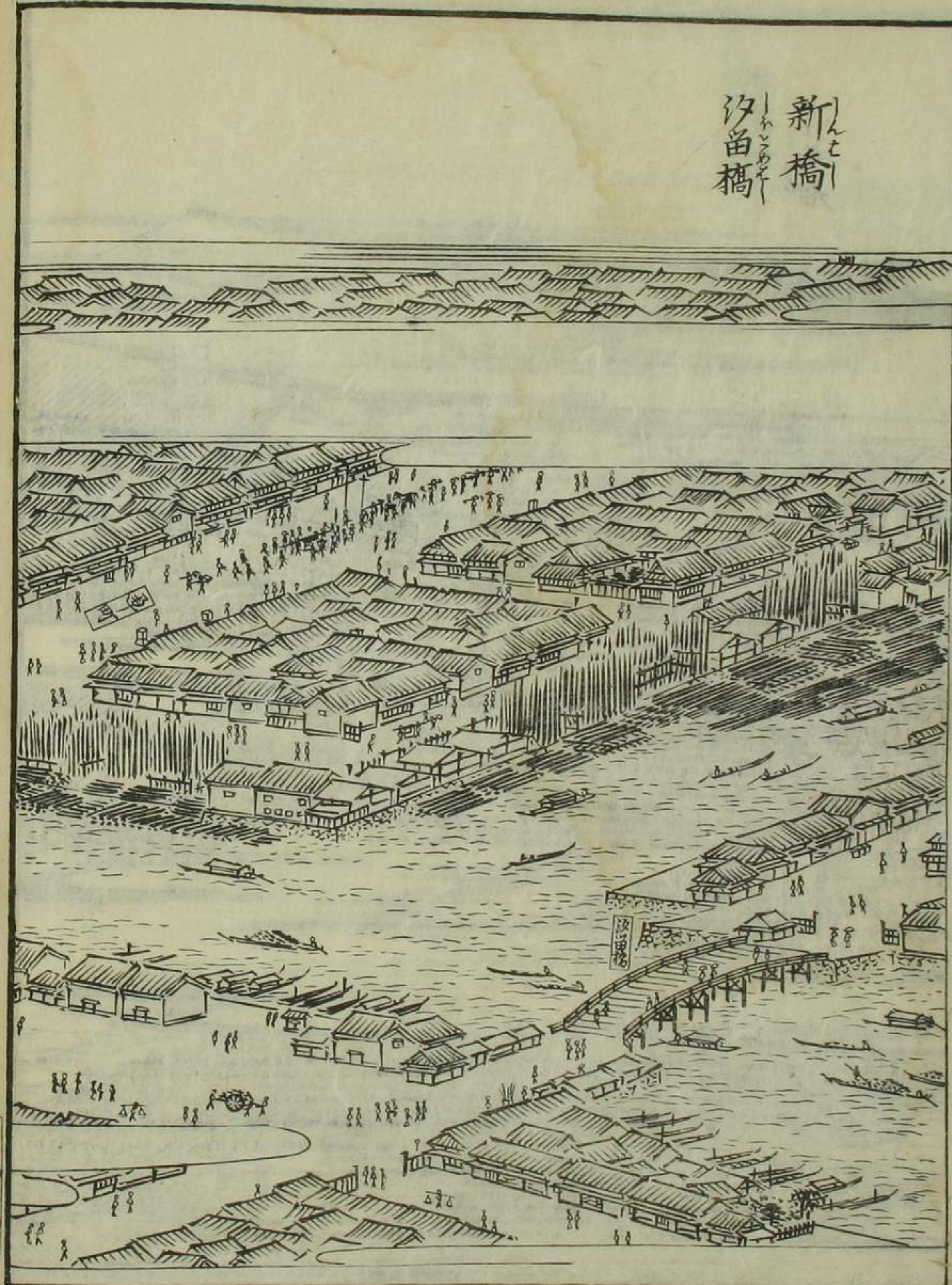


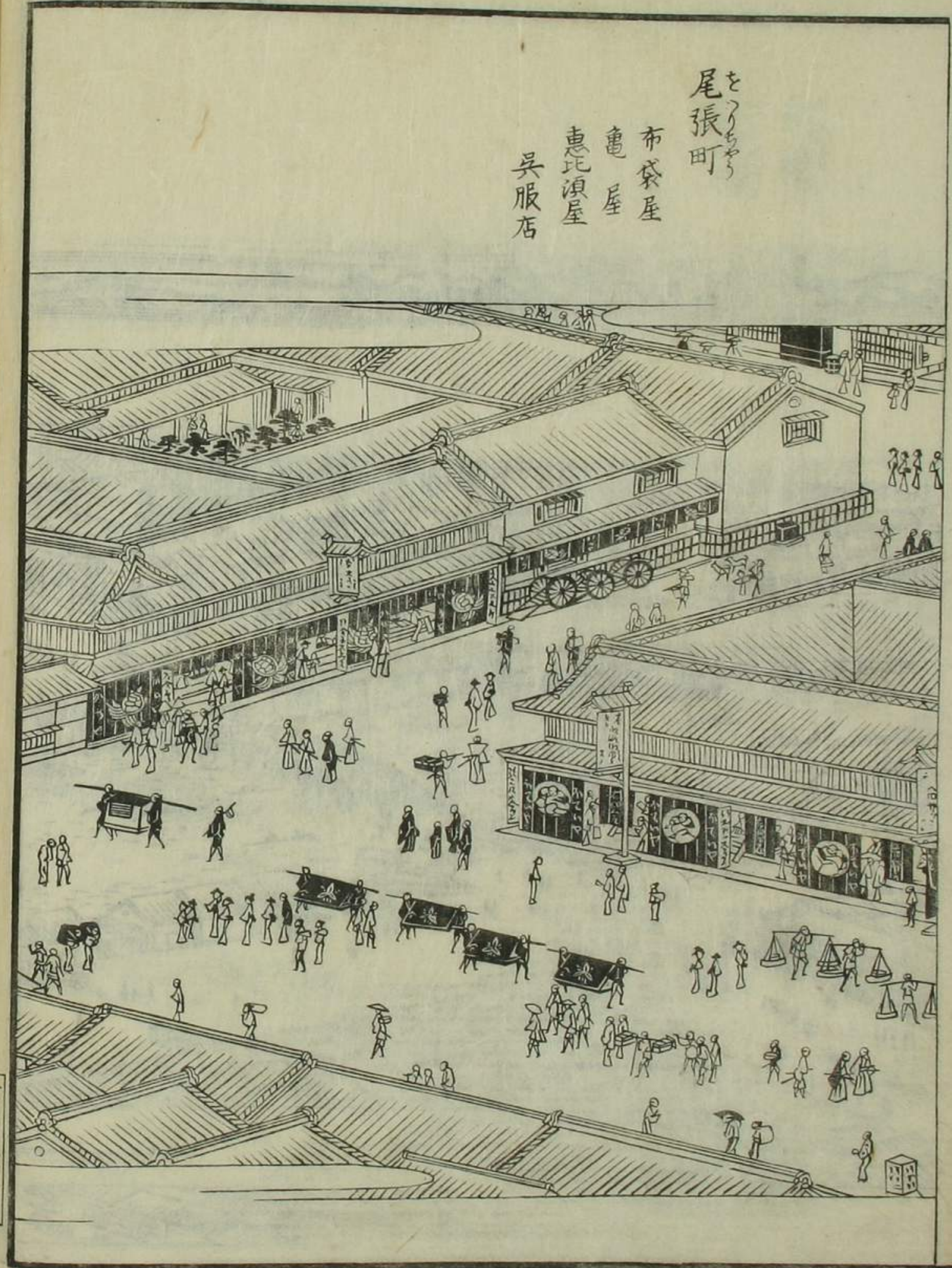
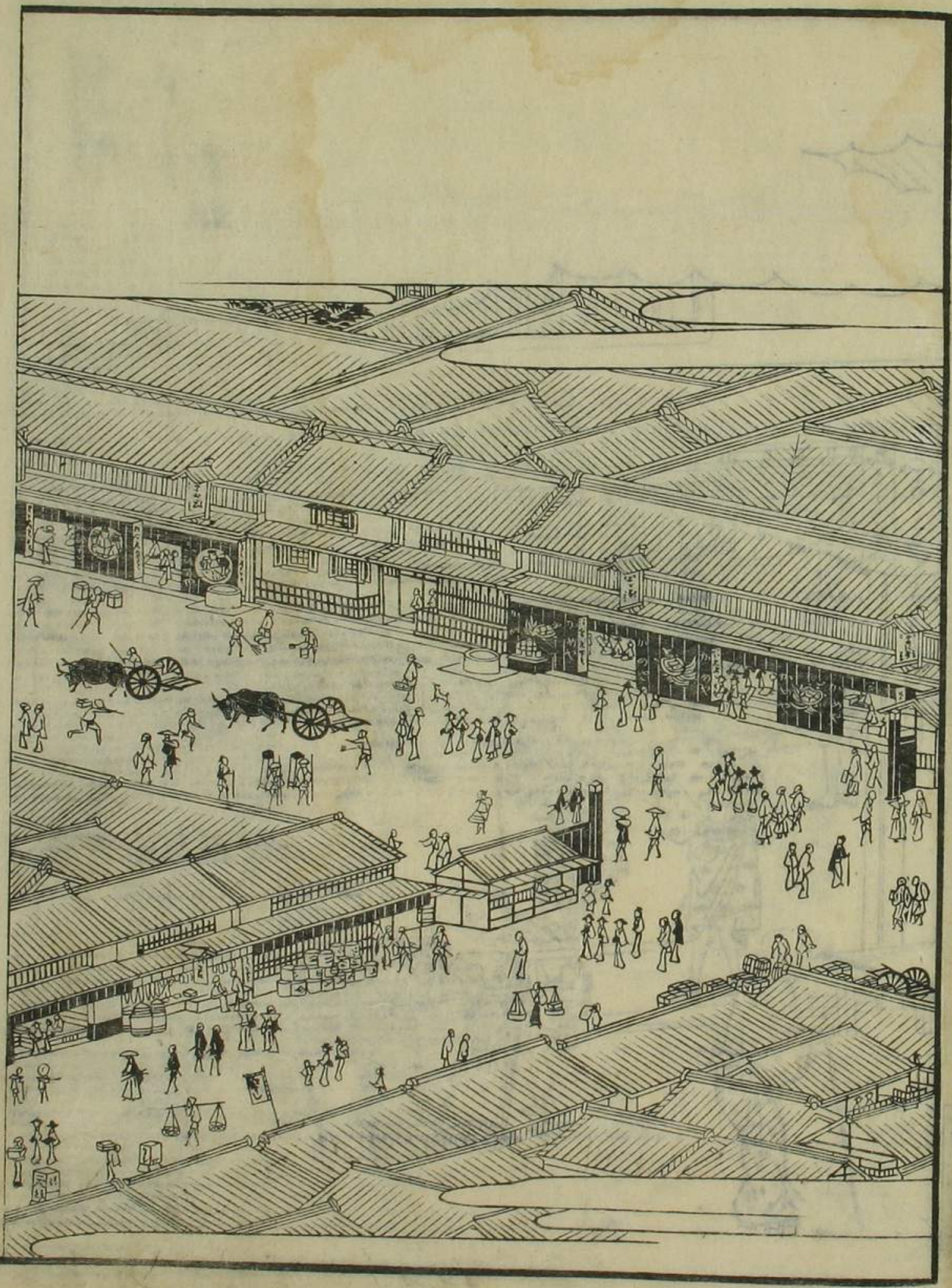
魚
一
右
二番
老

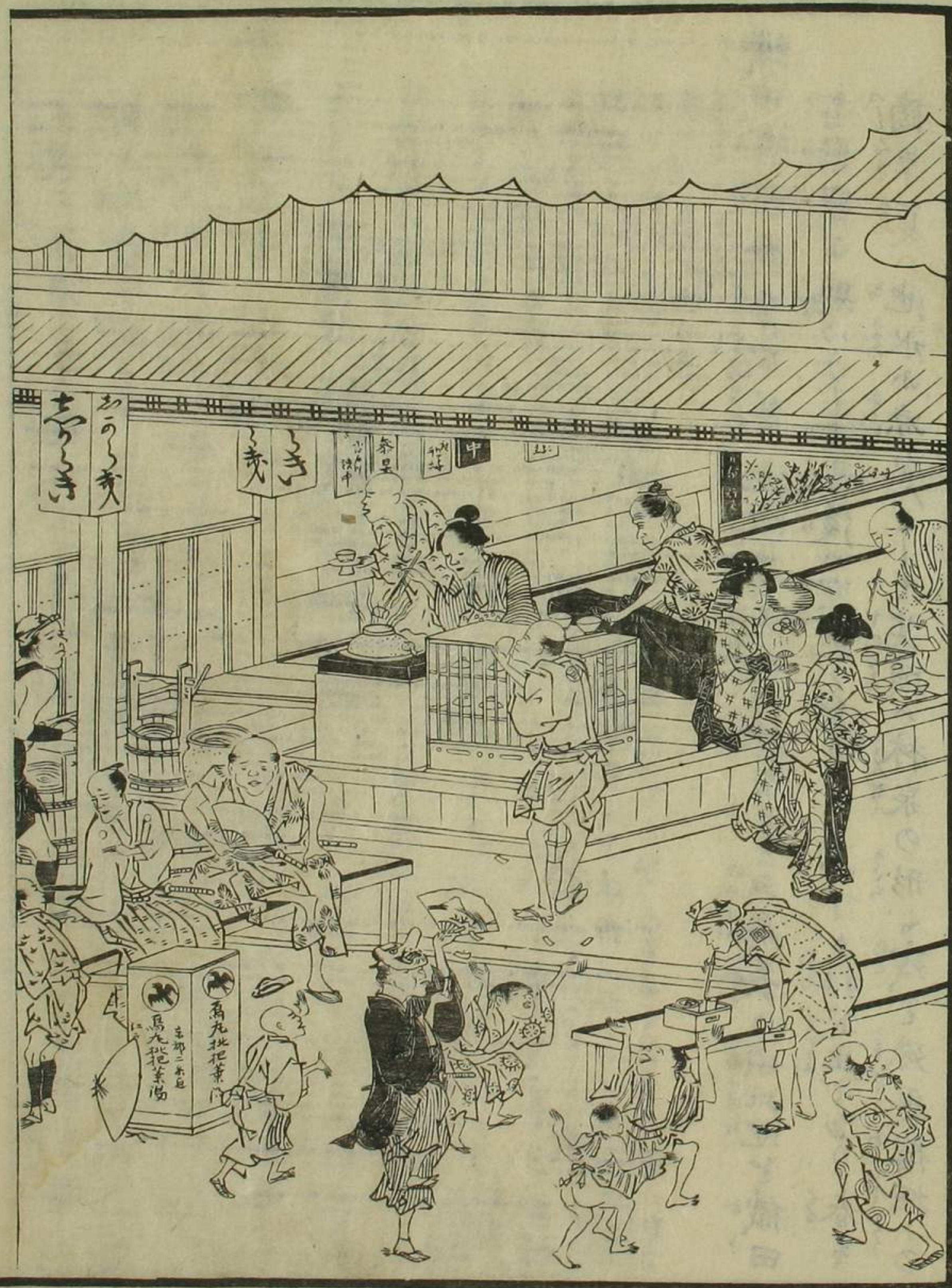




新橋
夕苗橋



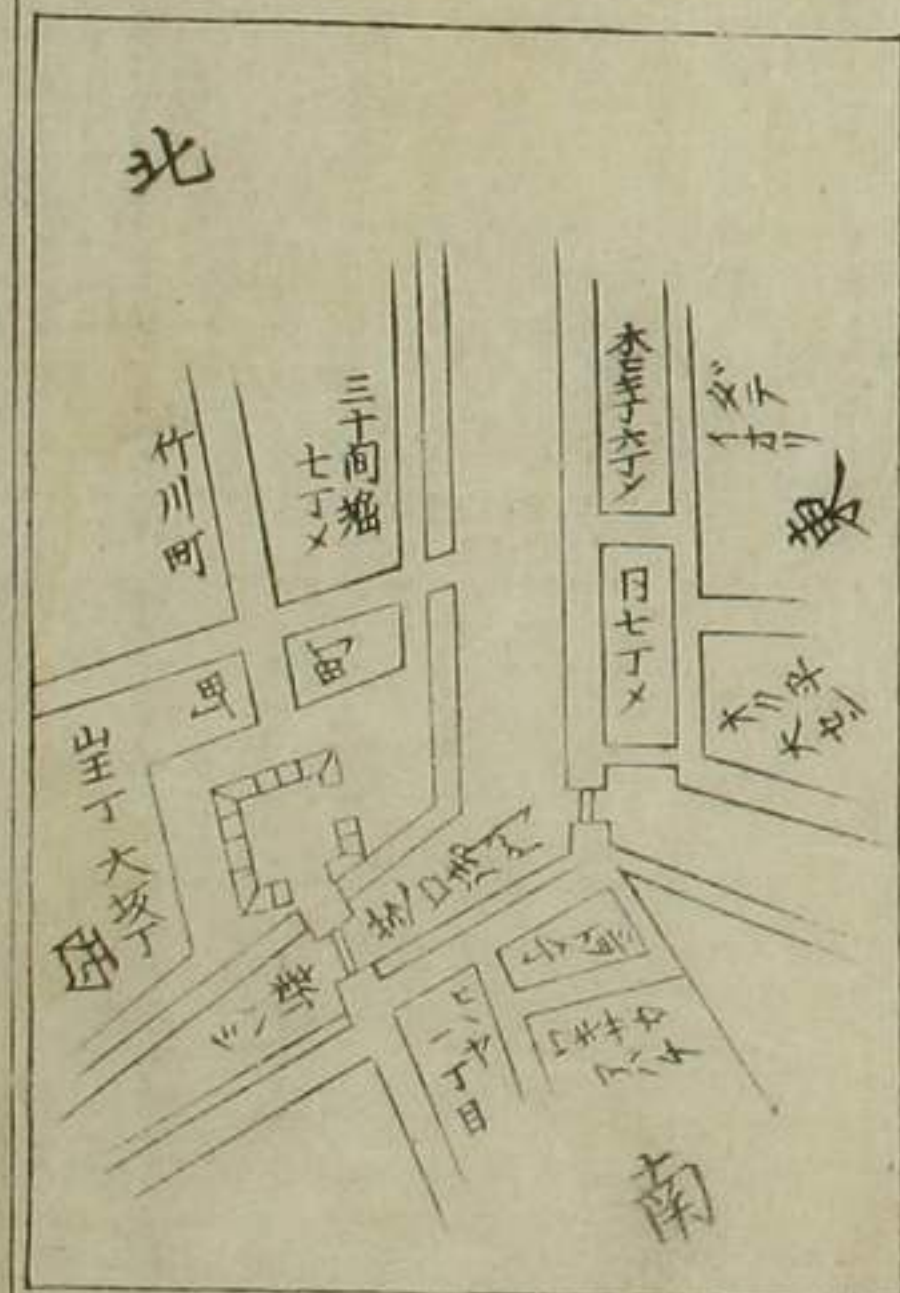




火災の後やき八麴町三丁目の裏へうつされ同十二年の頃跡へ
 新馬場を開くもこの頃馬場の地天明五年今の芝西應寺町との代
 此所の井と采女の井とのゆも彼やききの用水ありたふある名つてあり
 奇舞妓芝居 木挽町五丁目あり今森田勘弥の奇舞妓芝居綿々
 とく相續す 芝居の基源八塚町昔屋町 昔八此所六丁目山村長太夫
 とのひ 名代の狂言座あり中村市村森田等の芝居をありせし
 まつて四座ありしと正徳四年の頃故ありて此芝居を止めらるる
 初め八岡村長太夫と云実子なく後子七十郎とて養て子とす二代岡村
 五郎左衛門是なり後名を改て山村長太夫といふ是も女子のありし
 相續す此の時に至りて断絶せりあり此芝居八正保元年申歳始りて東海道名所
 記は木挽町は喜太夫と浄瑠璃屋外異類異形のものと云ふるは昔ハ狂言
 座の外は是れ物の路
 織田有樂齋弟宅地 元教寄屋町の地なりと云慶長の頃此地を織田
 有樂齋に賜りし後ハ空地となりて三四丁に程芝生となり春を
 摘草夏ハ池水小涼んとく其頃ハ林泉の形も残り殊更櫻楓ホの

二樹多く春秋共遊望の地ゆ寛永の頃迄ハ折みふあり
 大樹此地は遊獵をとりせられしあり 有樂齋名長益源五郎と
 融覚信長公の弟や茶道と利休居士に受て一家の風あり元和七年は卒也
 此人茶室は長す故宅地はのちとて教寄屋を建置れり旧跡なりと云
 後世土人教寄屋の唱とて町の名よとてりたり
 新橋 大通り筋出雲町と芝口一丁目との間は係正徳元年辛卯朝鮮
 人來聘の前宝永七年庚寅此所は新馬場と改て造営ありし
 芝口御門と唱へ橋の名も芝口橋と更らるる享保九年正月廿九日
 の火災は焼七も此後ハ復旧の町家とあされり 此川筋の東木挽町
 七丁目と芝口新町の間は架せしを
 汐留と云ふ

正徳四年
 江戸圖



江戸名所圖會天樞之上畢

